

506
119

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{19/m} 1 2 3 4 5

始



506-119



荒木茂著

ペ
ル
シ
ヤ
文
學
史
考

大正
11. 5. 31
内交

岩波書店刊行

To
My "Guru"
A. V. Williams Jackson
of
Columbia University.

Foreword
to

Shigoru Araki's Persian Literature,
by

Professor A. V. Williams Jackson,
Columbia University, New York City, U. S. A.

Persia is known in history as the Kingdom of the Lion and the Sun, and in literature as the home of the Nightingale and the Rose. Its monuments in stone go back to remote ages of antiquity; but still more remote in time are its monuments in literature.

✽

The ancient Sacred Books of Zoroaster, the historic Prophet of Iran, as preserved in the Avesta, date back more than twenty-five centuries ago, and live on in portions of the later Pahlavi Writings of the Sasanian Empire of Persia (A. D. 226-650), to be the Scriptures of the Modern Parsis of India and Persia. That great Achaemenian king of antiquity, Darius I (B. C. 500), has left 'Sermons in stones' in his Rock Inscriptions, to tell generations to-day that the God Ormazd granted him victories which made his Empire immortal in history.

It is true that the Muhammadan Conquest of Persia by the Arabs, in the seventh century of the Christian Era, destroyed for a time the glories of Iran; but a national revival came to pass, and the native literature awoke rejuvenated soon again in song, with verses that make Persian poetry one of

the lasting literary heritages of all time.

It is particularly gratifying to think that the Island Empire of Japan, with all its growing progress, should count among its scholars Shigeru Araki, a Master of Arts in the truest sense of the title; and that it should show to him encouragement in his scientific task of making better known to the Niponese the past literary records of the Land of the Lion and the Sun.

I account it a rare privilege to have had Mr. Araki as one of my special Japanese pupils in the study of Sanskrit and the Iranian Languages. He is a young man who knows, from the originals, Persia's literary contribution in the domain of the Sacred Books of the Avesta and the Pahlavi Texts. He has heard ring in his ear the epic strains of old Firdausi in heroic Persian verse; and has followed the romantic tales of Nizami in the Persian epopoe

He has listened to the story-telling art of Sa'di, with its intermingled bits of charming rhyme; and has translated into Japanese the world-renowned Quatrains of Omar Khayyam, while knowing equally well the lyric measures which made Hafiz one of the eternal masters of song.

It is privilege and a pleasure to wish best wishes, as always, for the success of the work of my devoted Sisya, Mr. Araki, whose Guru, in the old Sanskrit sense of the term, I am glad to have been; and I shall ever remain his friend.

A. V. Williams Jackson

自序

凡そ、如何なる言語の遺跡にも、各時代の特色と、その獨特の國民性並に接觸せる他國民の影響等が、明かに示されて居ることを容易に知ることが出来る。吾人はその著しい例證をペルシヤ語の歴史に認めるものである。

然るに種々なる變動を経たるペルシヤ語の複雑なる性質が、その研究を特に困難ならしめたる爲めか、歐米の學者間にも、その部分的研究は多く發表されて居るけれども、古代より近世に及ぶペルシヤ語の系統的研究を一冊に纏めたるものは、誤謬に満ちたる一、二を除き、外に無いやうである。

予は曩に比較言語學に興味を有し、インド、ユーロピアン語系に屬する主なる歐米諸國語を學び、その語系の内にて、最も古き言語として知らるるサンス

クリット語の研鑽に従事した。それと同時に、その姉妹語たるベルシャ語の修得に志し、過去數年間、コロンビア大學に於て、古代ベルシャの研究を以て廣く知らるるジャクソン博士、並に十數ヶ國の言語に通ずるベルシャ人、ヨハンソン博士に師事して居つた。

予は斯學の研究に没頭して以來日尙淺く、學べる處も未だ尠いけれども、我が國に於けるベルシャ研究を盛ならしめんことを願ひ、時代の變遷に伴ひ、種々に變装せるベルシャ語の遺跡の大略を茲に述べて、他日の部分的研究の準備とする考である。

本書を草するに際し、參考せる書籍及び雜誌類の主なるものを卷末に擧げ、其等を自由に使用する便宜を興へられたるコロンビア大學に謝し、讀者の一覽に供したい。

終に、過去六ヶ年間、或は師とし、或は友として、予を指導された、エー、

グイ、ウリアムス、ジャクソン博士に衷心よりの感謝を捧げる。

千九百二十年三月、

紐育にて、

著 者 識

凡例

本書の内容の順序に就て、ジャクソン博士は、第一にゾロアスター教々典、「アヴェスタ」を説き、次にアカメニアン朝の楔形文字に就いて述べ、第三に中世期に屬するパロラヴィー文學を説明するのが、時代に伴ふ順序であると教示された。然し、予は先づアカメニアン朝の遺跡につき述べ、而して後、アヴェスタン、パ・ラヴィー兩文學を引き續いて説明した。その理由は、

第一に、アカメニアン朝の遺跡の年代は明確であつて、何れの學者も反對する餘地がないが、現今迄傳へられて居る「アヴェスタ」の寫本は、その内容の一部分のみが古きに屬して居つて、現存する形になつたのは、アカメニアン朝以後であること、

第二に、アヴェスタン文學とバラウヰー文學とは、密接なる關係を有し、二者連續して説かるべき性質のものである故、である。

「近世ベルシャ語の諸作」の章に於て、特に次の事項に就き讀者の注意を求めたい。

- (イ)、中世期以後のベルシャ人は、各自の姓名の前後に、先代の姓名又は特有の綽名等を書き連ねるものである。然し、其等の判明せるものは、總て卷末に附した附録の年代表に集録し、本文中には簡明を期する爲め、特別なる場合を除き、普通歐米の學者間に呼ばるる俗稱のみを用ひた。
- (ロ)、此等の姓名が、歐米各國の言語に依つて書き表はさるる場合には、異なる學者が各自の信ずる儘に書き寫して、綴字が一定して居らない。されば予は片假名を以てベルシャ音に最も最近きものを書き表はし、普通英語にて用ひ

らるゝ綴を書き添へた。

- (ハ)、出生、死歿の年月に就き、記載してないものは、現今に至る迄不明とされて居る分である。詳細に就いては、卷末の附録を参照せられたい。

本書の第一稿は、昨年コロンビア大學に於て草したものである。爾來數回の改訂を経て、此度出版するに際し、種々有益なる助言を與へられた東京帝國大學文學部教授高楠順次郎博士、及び藤岡勝二博士に衷心よりの感謝を捧げる。

目次

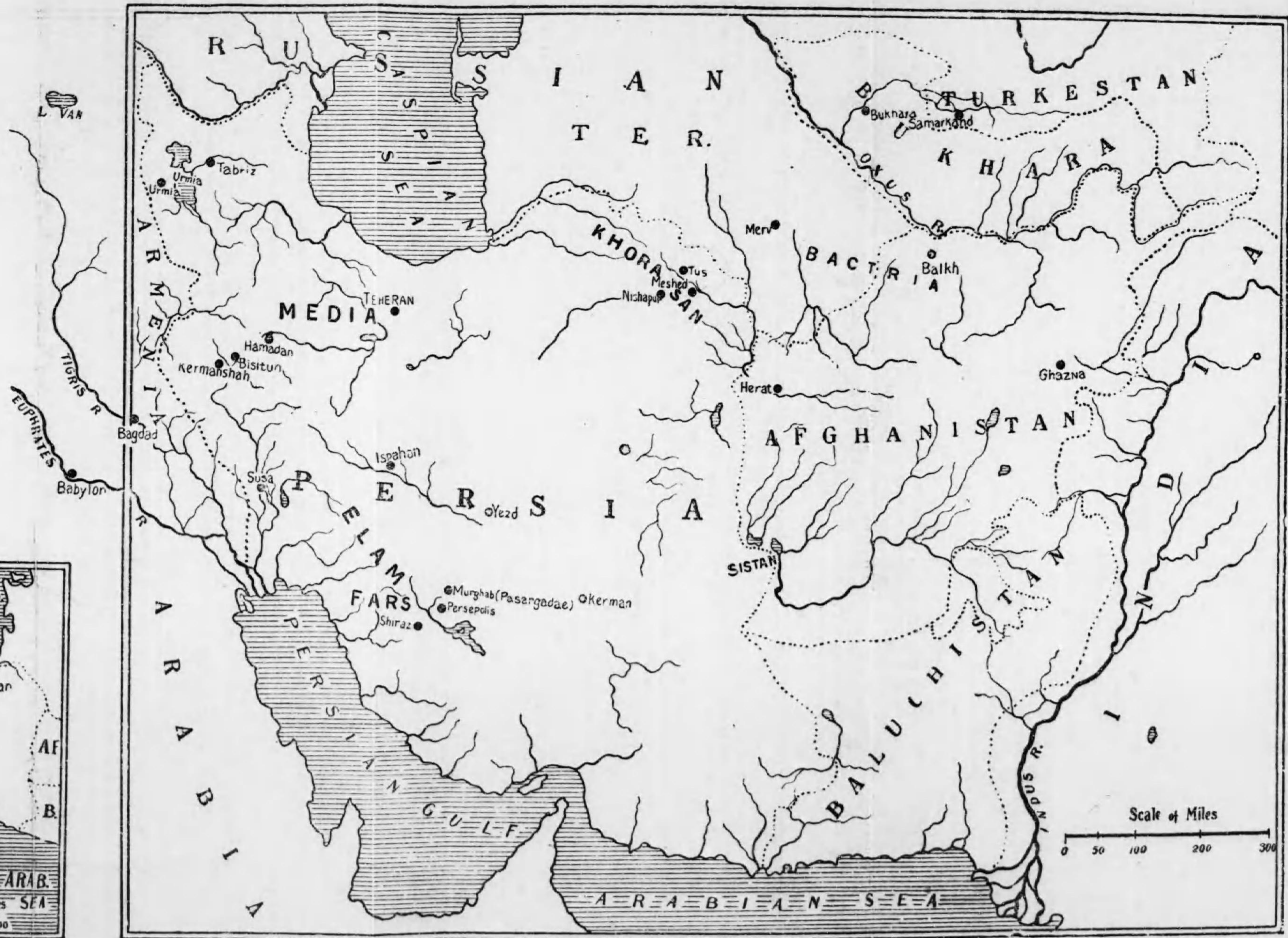
一、緒論、……………一
二、アカメニアン朝の遺跡、……………三一
三、アヴェスタン文學の沿革、……………七五
四、パルラヴィー文學の内容、……………一二九
五、近世ベルシヤ語の諸作、……………一六一

○附録、

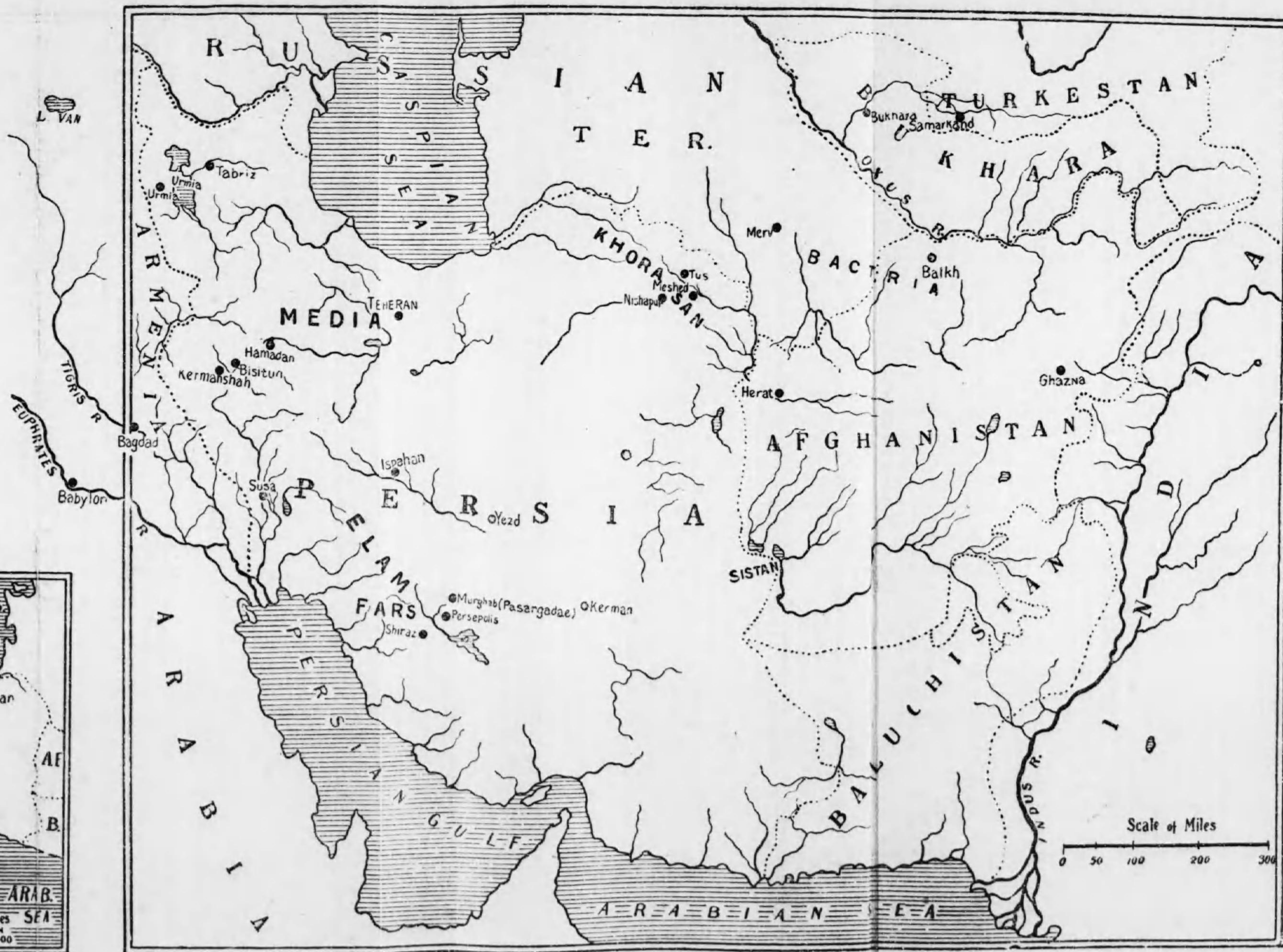
(イ) 年代表、……………一—二一
(ロ) 参考書類目録、……………一—二〇
(ハ) 挿畫目録、……………一—四

目次





「ヘルシヤ」文學史者參考地圖

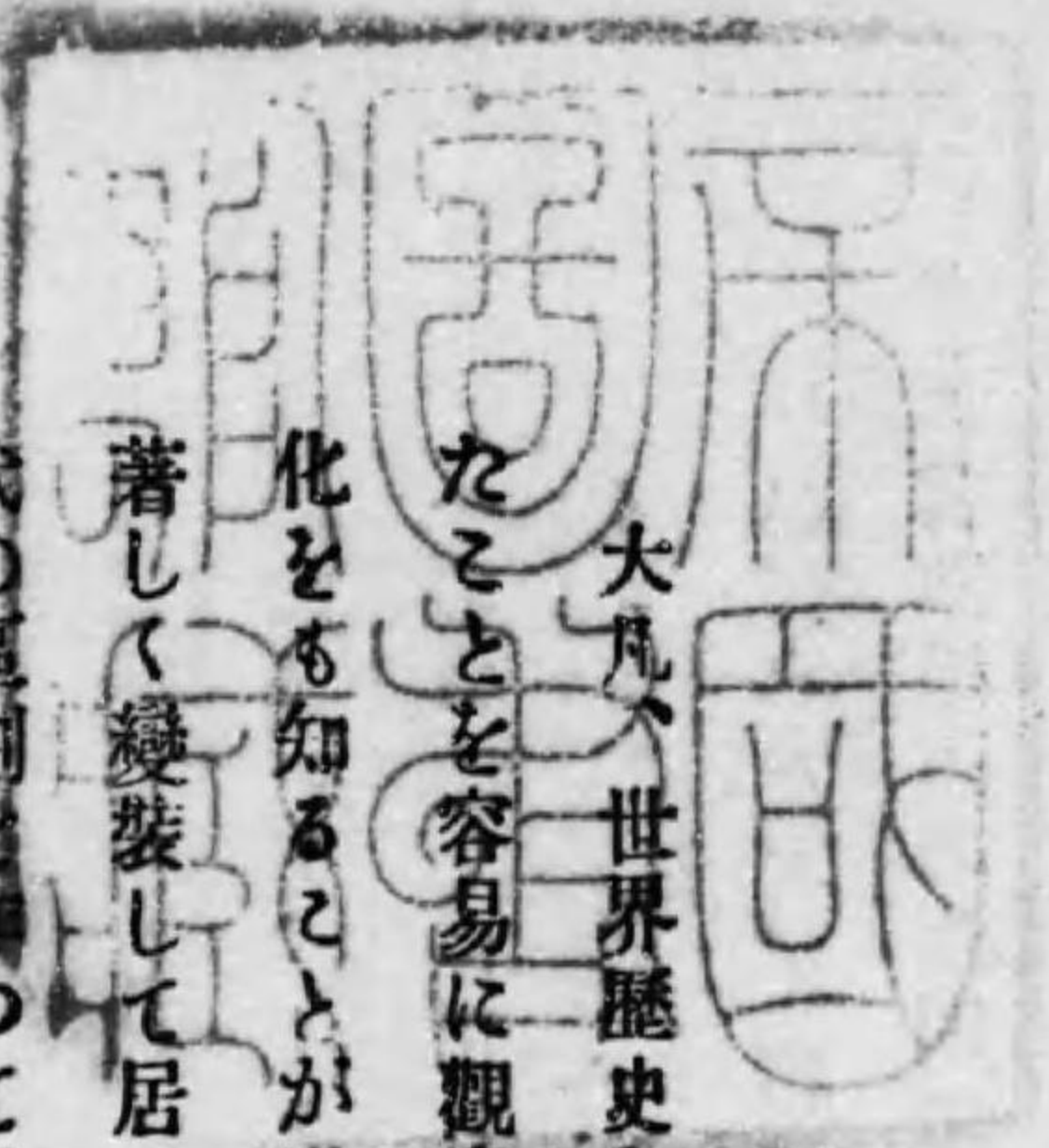




MOHAMED SHAH

緒

論



大凡、世界歴史を繙くものは、古來屢々ペルシャの國體が、外患の影響を蒙つたことを容易に觀察し得る計でなく、ペルシャ人の思想上に起つた、種々なる變化をも知ることが出来るであらうが、彼等の國語も亦、殆ど他に比類がない程、著しく變裝して居るのである。然しその遺跡に就て叙述するには、判然たる時代の區劃を備つて説明するよりも、寧ろ以下に述べたやうに、時代と密接なる關係を以て、變化した文字に基いて、遺跡を四分し、研究する方が明瞭であると思ふ。

抑も、ペルシャ語は言語學上何れの系統に屬して居るか。今その太古に溯つて

考へて見ると、ペルシャ語は、今日歐洲各國に用ひらるゝ諸國語と共に、アリアン (Aryan)、或はインド、ユーロピアン (Indo-European) 語系に屬し、その内に最も古き言語として知らるゝサンスクリット (Sanskrit) 語の姉妹語であつて、インド、ユーロピアン語系中のインド、イラニアン (Indo-Iranian) 系種に屬する言語である。

此インド、イラニアン語を使用した種族は、彼等の分離する以前には、皆同一の言語を使用したと云ふ學説が、一般に承認されて居るのである。然し、此インド、イラニアン種族の分離後、印度に南下した民族はサンスクリット語を用ひ、ペルシャに移住した者は古代ペルシャ語を使用した。此等二語の類似點を、言語學上の法則に照して見ると、彼等二族が分離して以來、未だ長年月を経て居らない事を證明せられるのである。今左にその類似せる變化を例證すれば、

(Sanskrit)

(Old Persian)

हस्ता (hasta), 手.	(Avestan) .wōjuyš (zasta)	(Cuneiform) 𐎠𐎡𐎴𐎠 (dasta).
नामान (nāman), 名.	𐎡𐎴𐎠𐎡𐎴𐎠 (hāman)	𐎠𐎡𐎴𐎠𐎡𐎴𐎠 (nāman).
सहा (saha), 共.	𐎡𐎴𐎠𐎡𐎴𐎠 (hatha)	𐎠𐎡𐎴𐎠𐎡𐎴𐎠 (hadā).
जरा (jara), 年齒.	𐎡𐎴𐎠𐎡𐎴𐎠 (zaya)	𐎠𐎡𐎴𐎠𐎡𐎴𐎠 (draya).
आहम् (aham), 我.	𐎠𐎡𐎴𐎠𐎡𐎴𐎠 (azem).	𐎠𐎡𐎴𐎠𐎡𐎴𐎠 (adam).
(たろ)	(たろ)	(たろ)

の如くに、酷似せる點を容易に認めることが出来るのである。

次に、彼等が如何にしてペルシャ人と呼ばれ、又國土が「ペルシャ」と稱せらるゝやうになつたか、その由來を説明して見る。古來ペルシャ人は、自らを「イラ

「Iranî」と呼び、國を「イラン」(Iran)と稱して居るが、その「イラニ」と云ふ語は、ペルシャ古代の宗教、ゾロアスター教(Zoroastrianism)の教典「アヴェスタ」(Avesta)にある一語「アイリヤ」(Airiya)と云ふ語が變化したのであつて、アリヤン人の國と云ふ意味である。而して今日世界一般に知られて居る名稱「ペルシャ」は、その一州の名「ファールス」(Fars)、即ち古の「パルサ」(Parsa)に基因して居るので、最初希臘人に依つて呼ばれた名が、今日まで傳へられて居るのである。英國のブラウン(E. G. Browne)の説いて居るやうに、此ファールス州は、ペルシャ史上に最も有名なアカメニアン(Achaemenian)朝と、サセーニアン(Sasanian)朝との始祖を出した爲めに、その名が廣く知られ、遂にはペルシャの全土を斯く呼ぶやうになつたやうである。然し、今日「ファールシ」(Farsi)と云ふ語は、ペルシャ人が彼等の母語を意味する時と、特にファールス州の土民を指して呼ぶ場合とのみ用ひられ、又印度に於ては、ゾロアスター教の信者を

「パーシ」(Parsi)と稱して居るのである。

次に、ペルシャの歴史とその言語との關係に就て、先づ大略を述べるならば、先づ今日のペルシャの地理的位置に於て、最も古く知られた國は、エクバタナ(Ecbatana)〔今のハマダーン(Hamadan)〕を首府としたメディア(Media)であつた。その境界は勿論明かでないが、今のペルシャの西北部を占めて居つたやうである。かの有名なる希臘の史家ヘロドトス(Herodotus)は、メディア王として四人の名を擧げて居る。けれども、アッシリア(Assyria)の記録に依ると、メディアは彼等の配下にあつたやうに誌されて居る。又メディアに及したアッシリアの影響は、メディアに次いで起つたアカメニアン朝の彫刻類、碑文、或は神話に明に現はれて居る。此所謂メディア時代は、西紀前七百年代より西紀前五五十年に及ぶものと稱せられて居るけれども、メディア人自身は、如何なる記録をも後世に遺して居らないのである。従つて斯る國の存在が事實であつたか、或は單

に傳説的のものであるか、判断し得る何等の根據がないのである。獨乙のノエ
ルデケ (Th. Nöldeke) は、ハマダーン附近を精密に踏査するならば、必ず何等か
の證據を發見し得べきを述べ、且、此時代に次ぐアカメニアン朝の言語と、メ
ディア語とは殆ど同一であるとまで説いて居る。又、佛國のダルメストッティ
(J. Darmesteter) は、ゾロアスター教々典のアヴェスタン語をメディア語である
と解釋し、オーベル (J. Oppert) は、メディア語がアリヤン語系に屬するもので
なく、トゥラニアン語の一屬であつたと、主張したことをさへあつたのである。斯
の如く異説あるメディアに就ては、不幸にして殆ど三千年後の今日、證據となる
べき如何なる發見もなく、尙學界の懸案となつて居るのである。

此メディア朝がペルシアの西北部に根據を据えて居つた間に、ペルシアの西南部
には、スーサ (Susa) を中心としたエラム (Elam) 朝の名が知られて居つたやう
である。佛國のメイエー (A. Meillet) の如きは、メディア朝に次いで起つた、ア

カメニアン朝の始祖サイラス (Cyrus) は、元エラム朝の王であつたやうに述べ
て居る。

歴史上に知られて居る次の王朝は、前述のファールスに現はれたアカメニアン
朝であつて、西紀前五百五十年、エラム朝の王サイラスが、メディアを征服して、
國の基礎を固めたとせられて居る。後ダリアス (Darius) 王の時に至つて、西亞
細亞全部を平定し、その武威は、印度より埃及にまでも及び、彼に續いた歴代
諸王の偉業に依り、西紀前三百三十年、かのアレキサンダー (Alexander) 大王
が、ペルシアを遠征するまでの文化には、多く見るべきものがあつた。嘗て、ア
カメニアン朝の首府であつたパーセポリス (Persepolis)、又パサーガダイ
(Pasargadae) 等に、その跡を遺して居る宮殿の如きは、永年の風雨に曝されて、
甚しく荒廢して居ても、尙、現今のペルシアが、夢想だになし得ない壯大を極め
たものである。此アカメニアン朝が、始めて、吾人に研究の資料を與えて居る。

即ち、彼の有名なるビストゥム (Bistum) 巖上の碑文、パルセボリス等の宮殿の荒廢せる石柱、或は大石階に彫刻されたる楔形文字の記録等が、當時の文化を物語つて居るのである。

翻つて、前記のアカメニアン朝の記録等に用ひられたる楔形文字の言語と密接なる關係を有し、而かも、言語學上變裝せる他の時代のペルシヤ語に就て一言しなくてはならぬ。即ち、ゾロアスター教の教典に用ひられたアヴェスタン語が其である。往時、多くの學者は「アヴェスタ」を、「ゼンダヴェスタ」(Zend-Avesta)、或は畧して「ゼンド」(Zend)と呼んだ。然し、それは彼等の誤謬であつて、ゼンダヴェスタと云ふのは、アヴェスタの原文と、中世期のペルシヤ語、即ちパルサーヴィ (Pahlavi) の註釋とを一纏めにしたものゝ名稱である。而してゼンドとは、單にゾロアスター教々典中の一部分のアヴェスタン語に、部分的に加えられた註釋を意味するのである。更に、パザンド (Pazend) と稱する部分は、

前述のゼンドに加えられたる註で、パルサーヴィ語中に混用せられた所謂フツザーリ、シ (Huzvarish) 「アラマイク (Aramaic) 語」を、ペルシヤ語に書き更へたるものを云ふのである。

扱、此アヴェスタン語の年代に就ては、多くの學者が意見を異にし、西紀前數千年より、西紀數百年に亘る年代に、學者が各自の立脚點を見出さうとして居るのである。言語學上より推定すれば、前述の如く、アヴェスタン語とアカメニアン朝の言語とは、餘りに時代を異にして居らないので、米國のジャクソン (Dr. V. W. Jackson) 博士の説、即ち西紀前第七八世紀頃に用ひられた言語であらうと云ふ説が有力なやうである。又、此アヴェスタン語が、何れの地方に使用されたかと云ふことに就ても、多くの學説があるけれども、ダルメストゥテールが説いたやうに、少くとも、所謂メディアの一部に通用された言語であらう。その理由は、獨り、アカメニアン朝の諸王が遺した記録の言語とアヴェスタン語とが、

言語學上深い關係を有する計でなく、アヴェスタン文學中に、所謂メディアの領土に屬する地名が、多くあることである。

然し、アヴェスタン文學の中心人物たるゾロアスターが活動を初めた場所は、ペルシャの東北に位するバクトリア (Bactria) 附近であつたので、アヴェスタン語は、その地方の言語であつたやうに説く學者もあるけれども、餘りに穿ち過ぎた説のやうである。只だ、アヴェスタン文學中の「讚頌」(Gāthā) は、他の部分に比較して古く、ゾロアスター自身、又は、彼の存命中、彼の弟子等の用ひた言語を以て書かれたものであり、「ガーサー」を除きたる他の部分には、其より以後に用ひられた言語を使用したものであると云ふ説が、一般學者から認められて居る。換言すれば、ゾロアスター存命中には、彼の生地と信ぜられて居るペルシャの西北部にも、バクトリア附近で通用した「ガーサー」説が使用されたのであるが、時の變遷と共に、言葉も變化して、一見兩者の別を識ること

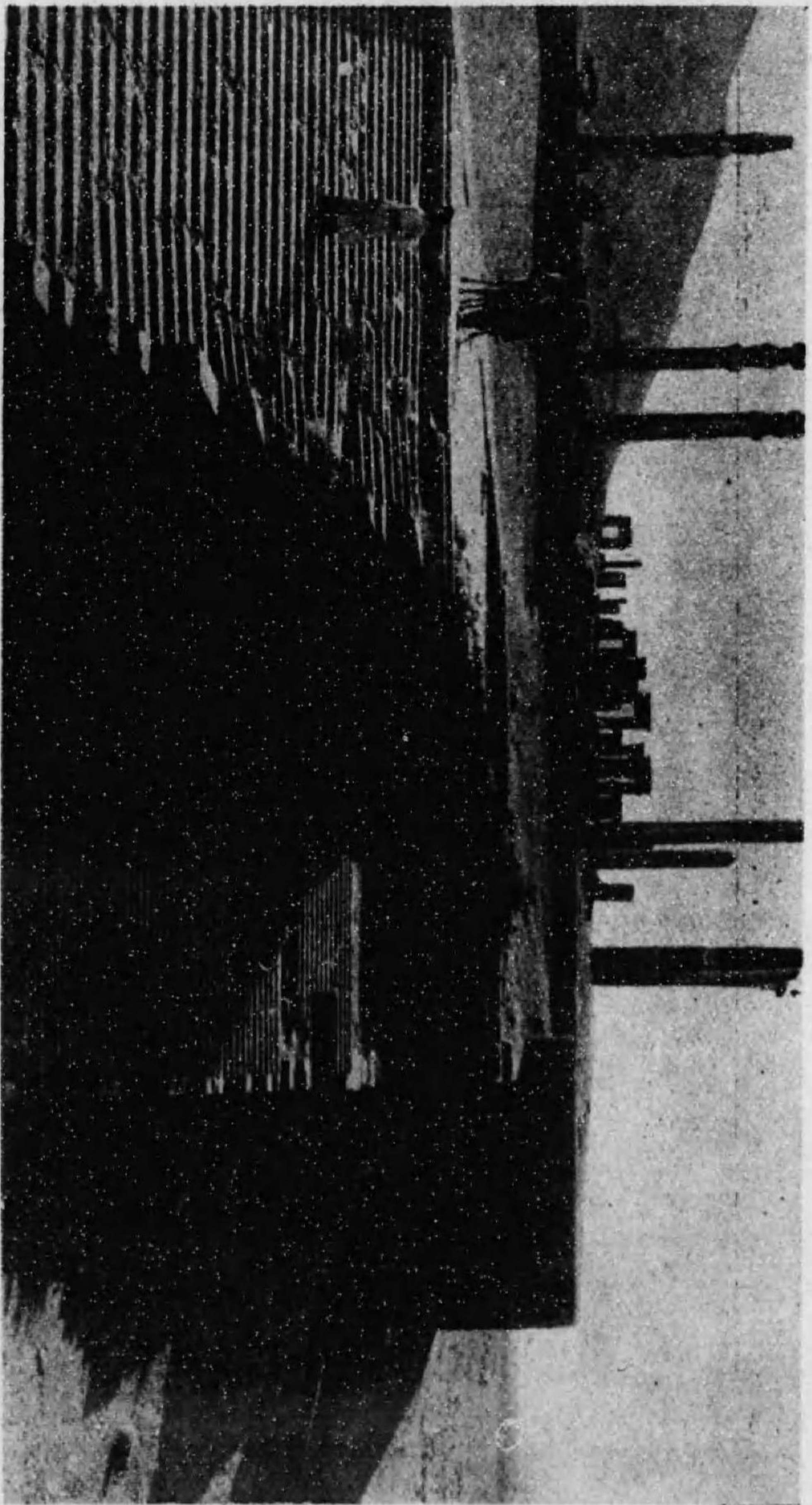
が出来たる程になつたのである。斯くて、アカメニアン時代の言語と、アヴェスタン文學中の「ガーサー」語とが、他の部分より一層密接なる關係のあることも、容易く解し得るのである。

處が、かのアレキサンダー大王が、西亞細亞全部を侵略し、その勢インドにまでも及んだ時、獨りペルシャのみならず、附近の國々は、一時渾沌たる状態に陥り、大王の死後には、「二百四十餘の小王」が、各地に割據する不安な時代となつたのである。勿論、この希臘勢の侵入は、ペルシャその他の國々に、表面的大なる影響を及ぼしたけれども、その專横を極めた期間も短かゝつたので、人心には左程の變動を與へなかつたやうである。

希臘の史家ディオドルス (Diodorus) 等の遺文に依ると、アレキサンダー大王が、戰勝を祝するため大饗宴を張つた時、酔ふた彼は、アゼンスの媚婦サイス (Thais) に煽動せられ、嘗て、アカメニアン朝のザルキセス (Xerxes) 王が、

希臘人の神殿を破壊した復讐として、かの有名なるパルセポリスの宮殿に火をかけ、その裡に藏されてあつたと稱せらるゝ無数の書籍、その他の貴重品を烏有に歸せしめたと誌されて居る。此一事すら、今日のペルシャ文學研究に、一大瑕疵を遺して居ることは争はれない事實である。此希臘勢に次いで起つた羅馬族を率えるセルークス (Seleucus) も、ペルシャに、一時牛耳を採るやうに見えたけれども、その勢力範圍は、幸じて一部分に止まり、有名無實なパルセアン (Partian) と呼んだ王朝を建てたやうである。

次に起つたのが、ペルシャ人文史上に大なる關係を有する、サセーニアン朝である。此王朝では、西紀第三世紀ファールスに現はれて同朝の始祖となつた、アーダシール (Ardashir) を初めとして、續いた多くの王が、ゾロアスター教の熱心なる信者であつて、同教の再興を計り、失はれたる教典の蒐集に努めたので、當時の官語であつたパラーヴィ語を以て、教理を註釋した多くの著作が



By the Courtesy of the Macmillan Co.

THE GRAND STAIRCASE AT PERSEPOLIS

(From Jackson's Persia Past and Present)

出来た計でなく、其他、文藝的趣味を帯びたる作まで、現はれるやうになつたのである。

此頃より、インド、イラニアン語とは全く異なる語系に屬する言語で、當時ペルシア人が接觸した西亞細亞の一部分に使用せられたセミティック (Semitic) 語の影響が、ペルシア語の上に、明かに見られるやうになつたのである。前述のパーラヴィー語が、世界に多くある言語の中でも、最も解し難き言葉の一つとなつたのは、實に此處に起因して居るのであつて、今日尙不明瞭なる點が、パーラヴィー文學の中に多くある所以である。

既に述べたやうに、アレキサンダー大王がペルシアを侵略した時に、住民の上に與えた影響は、單に表面的な施政上に止まつて居たが、この國特有な思潮に、眞に根本的な變動を當へたのは、ムハムマド (Muhammad) 教徒の、精神的襲略より始つて居るのである。曩に、豫言者ムハムマドが現はれてから、アラビ

ア (Arabia) の勢力は頓に擴張し、當時末路にあつたサセーニアン朝も、遂にムハムマド教徒の掌中に歸するやうになり、西紀第七世紀の頃には、ベルシャの全土が、ムハムマド教徒に壓せられるやうになつて、ベルシャ古來の宗教、文學等、總て根底から動搖されるやうになつたのである。而して、彼等ムハムマド教徒の武器であつた教典「クラーン」(Quran) の語、乃ちアラビア語が、ベルシャ語に代つて堅く根據を据えるやうになり、ベルシャ語もアラビア文字を以て書かれ、內的にも、アラビア語の影響を多く受けるやうになつて來たのである。斯る間に、ゾロアスター教は漸次に衰退し、信者もムハムマド教徒の迫害に堪えずして、故郷を逃れ、居を印度に求め、昔時熾んであつたゾロアスター教も、今日印度のボンベイを中心として、漸くその餘喘を残して居る位になつたのである。ムハムマド教徒の諸朝も、勿論幾多の内憂外患に遇つた。即ち、ツグリルベグ (Tughril Beg) の率ゐたるセルズク (Seljuk) 族の如き、成吉思汗 (Chenghiz

Khan) のモンゴール (Mongol) 族の如き、タイムラング (Timur Lang) のタール (Tartar) 族の如き、何れも政治的に著しい變動の原因となつた。けれど、宗教上、言語上には、如何なる影響をも遺して居らないのである。斯くて、純粹なるベルシャ語の著作は漸次減じ、アラビア語を以て著されたる書籍のみが、増加するやうになつたのである。

以上に、予は、ベルシャの歴史と言語との關係を、極めて簡単に説明したのであるが、翻つて總體から見ると、ベルシャ語學史上に、二つの大なる間隙^{ギャップ}を認める。第一は、アレキサンダー大王が、ベルシャの平和を攪亂して以來、サセーニアン朝の勃興に至る五世紀間の一大間隙であり、第二は、サセーニアン朝が滅びてベルシャ全土がムハムマド教徒の勢力範圍に歸するまで、二三世紀間の間隙である。第一の間隙は、單に長時期であつたと云ふ計で、已に述べたやうに、唯表面的の動搖に過ぎず、異族の根跡は少しも残らなかつたが、第二の

間隙は、短期であつたにも拘らず、深刻に且つ永遠的な印象を、ペルシャ人の腦裡に銘じたのである。之れは勿論、政治的影響ではなくして、人心の深奥にまで達した、宗教的感化に外ならないのである。

以上の言語上の區劃と歴史的年代との概要を對照表に依つて示す。

Linguistic Div.

Historical Division.

- | | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. Old Persian.
 { A. Cuneiform.
 B. Avesta.</p> | <p>1. Legendary Period. (From beginning To about 1000 B. C.)
 { a.) Indo-Iranian.
 b.) Early Iranian.</p> |
| <p>2. The Period of Assyrian Influence. (1000 B. C.-550 B. C.)</p> | <p>2. The Period of Assyrian Influence. (1000 B. C.-550 B. C.)</p> |
| <p>3. Achaemenian Period. (550 B. C.-330 B. C.)</p> | <p>3. Achaemenian Period. (550 B. C.-330 B. C.)</p> |
| <p>4. Macedonian Period. (330 B. C.-250 B. C.)</p> | <p>4. Macedonian Period. (330 B. C.-250 B. C.)</p> |

- II. Middle Persian. { 5. Parthian Period. (250 B. C.-226 A. D.)
 (Pahlavi) 6. Sasanian Period. (226 A. D.-650 A. D.)
- III. Modern Persian. 7. Muhammedan Period. (650 A. D.-)
- となるのである。尙、此等ペルシャ語の遺跡を、趣味の上から見ると、次の三部に大別することが出来ると思ふ。乃ち、アカメニアン朝の遺跡は言語學上並に歴史上より最も興味深く、アヴェスタン、パルラヴィーニ語の遺跡は、宗教及び神話の研究に資し、近代ペルシャ語に到つて、漸く文藝的趣味の作品が多くなつたやうである。

次に、歐洲の學者が如何にして此複雑なるペルシャ語の研究を進めたか、その道程を調べて見る。其處で最も吾人の興味を索く點は、先づ、第一に、該研究が、近代のペルシャ文學に對する興味より次第に溯つて中世期並に古代の言語研鑽に及んで居ること、第二に、亞刺比亞人文の研究が、引いて同じ文字を用ゆ

る近世ペルシア語の作品研究に端緒を與へたこと、とである。

抑も、近世ペルシア語と斯様な密接なる關係を有する亞刺比亞語の遺跡が、歐洲の言語に翻譯されたのは、第十二世紀の初、基督教徒となつた猶太人の手に爲されたものを以て嚆矢とする。爾來、歐洲人が此地方の研究に着目するやうになり、哲學、科學の研究上、東洋語の習得が是非必要であると云ふ説が盛になつたのである。斯くて、第十四世紀の初には、羅馬法王が、羅馬、巴里、オクスフォードの諸大學に、ヘブル語 (Hebrew) 語、カルデア (Chaldean) 語、亞刺比亞語の諸講座を設けるやうになつた。けれども、基督教徒の異教徒に對する偏見とも云ふべきものが、豫期した程の好果を齎らさなかつたやうである。進んで、第十六世紀の中葉、佛國のアンリ第三世が、フランス大學に亞刺比亞語の講座を設けた。續いてコンスタンチノーブル駐在の佛國大使サヴァリ、ド、ブリザ (Savary de Brèves) が、自ら監督して、西亞細亞諸國に通用せる各

國語の活字とを造らせ、他に多くの寫本をも購入して、徐々に研究の資料が歐洲に蒐集せられた。第拾七世紀には、該研究に興味を持つものも増加し、英國にもオクスフォード、ケムブリッジ兩大學に、亞刺比亞語の講座が再設せらるゝと共に、近世ペルシア語をも間接に研究せらるゝやうになつたのである。

斯くて、此世紀の終らんとするに際し、ハイド (Thomas Hyde) の宗教史「*Veterum Persarum et Parthorum et Medorum Religionis Historia.*」が出版され、衆目を索いたのであつた。勿論、此書に先立ち、歐洲大陸に於て出版された西亞細亞に關する多くの著書、及び西亞細亞諸國の寫本が、ハイドに多大の資料を供給して居つたことは明かであるが、未だ研究の進歩して居なかつた其頃の著書としては、他を凌駕するもので、後世多く引照される著書である。然し、不幸にして彼は、アヴェスタン、パーラヴィー兩語の知識がながつた爲め、多くの甚だしき誤謬を免かれなかつた。殊に、アカメニアン朝の楔形文字を

種の建築裝飾として立證せんと努めたるが如き、又、ゼンダヴェスタの意を誤解して叙述した結果、最近に至るまで、アヴェスタン語をゼンド語と誤稱せらるるやうになつた事など、その甚しきものゝ例である。而して、當時の學界は、未だアヴェスタン語、パौरラヴィー語を研究するまでに進んで居らなかつたのみならず、楔形文字が眞に如何なるものなるかをも知る學者がなかつたのである。只だ、近世ペルシャ語を以て著はされたる作、及び他の國語にて書かれたる多くの著書等に依り、漸次ペルシャ研究が、遅き歩調を進めて來たのである。勿論、ハイドが前記の著作を出版した當時、既に英國には、「アヴェスタ」の断片的寫本があつた。又、第十八世紀の始め、フレージャー(J. B. Frazer)の如き、ゾロアスター教の牧僧よりアヴェスタン語、パौरラヴィー語を學ばんと努めたこともあるけれども、彼等牧僧は、此等の語を秘密として、教授しなかつたやうな時代もあつたのである。

丁度此頃、佛國にアンケテイル、デニ、ペロン(Angueuil du Perron)と云ふ一青年が現はれた。彼は、當時未だ二十餘才の若年であつたけれども、その封ぜられたる秘密の鍵を發見して、母國の爲めに月桂冠を得んと企て、先づ佛國東印度商會の一兵卒として印度に渡つた。後、機を得てペルシャに入り、七ヶ年間、幾多の危険と困難を冒し、遂に、ゾロアスター教の牧僧に就きアヴェスタ、パौरラヴィー語を研究し、故國に戻つて、更に九ヶ年間の研鑽を遂げ、西紀千七百七十一年、「ゼンダヴェスタ、ゾロアスターの作」云々(Zend-Avesta, Ouvrage de Zoroastre, etc.)の著作を公にした。勿論、不完全なる點も多く包括されてあるけれども、彼の永年の忍耐が生んだ作は、確かに、該研究に一新機軸を與へたのである。

然るに、此書が出版された年、英國のウリアム、ジョーンズ(William Jones)は、デニ、ペロンの公にしたゾロアスター教々典の翻譯が、後世の牧僧に依り

偽作せられた教典に基きたるものなりと難じ、且つ、誤謬多き此翻譯は、ゾロアスターの教義を研究するに決して信を掛けぬものであると論破した。同じく、ジョン、リチャードソン (John Richardson) も亦、言語學の立脚地より、ゼントと稱せられたアヴェスタン、パーラヴィー兩語は、後世の製作であつて、ペルシャには、嘗て斯る言語が實際には存在しなかつたとまで論及したのである。斯くて、歐洲各國の學者は、デニ、ペロンを中心として起り、彼の翻譯の正誤と、斯る言語の有無等に就き、議論を繼續するやうになつた。

降つて西紀千七百九十三年、佛國のシルヴェストリ、ド、サシー Sylvestre de Sacy) が、研究雜誌 "Journal des Savants" 上に、サセーニアン朝のパーラヴィー語の碑文研究を發表した。此碑文を解讀するに際し、當時議論の中心であつたデニ、ペロンの著書が、大に預つて力あつたと云ふので、デニ、ペロンの翻譯、及びアヴェスタン、パーラヴィー兩語の作は、一部の學者が論駁するが如きものでないことが、自ら證明されるやうになつたのである。ジョーンズも亦、デニ、ペロンの著書に對する駁論に於て、自ら、多くの誤謬を曝露した。尤も、此ジョーンズに就て記憶すべきことは、寧ろ、彼のサンスクリット語の作品研究と、その研究に依りサンスクリット語が希臘語ラテン語等に酷似して居ることを發見した事實である。其後學者は競ふてサンスクリット語の研究を始めるやうになり、比較言語學なるものが世に紹介されるやうになつたのである。

斯くて、西紀千八百二十六年には、丁抹の學者ラスク (R. Rask) が一書を著はして、アヴェスタン語とサンスクリット語とが姉妹語であることを、公にしたのである。同時にその姉妹語であるペルシャ語の研究も、漸次進歩する様になつたのである。續いて、佛國のブーヌフ (Eugène Burnouf) は、彼のサンスクリット語の知識を以て、デニ、ペロンの著書を批評し、二三の書を著はした。然し、ブーヌフは、語根の説明にも多く誤まり、又、ガーサー訛が、「アヴェスタ」の

他の部分の言語と異つて居る事をも、見出すことが出来なかつたのである。此等の研究に資料となつたデニ、ペロンの書が著はされた頃には、頼むべき辭書もなく、文法を知るに由なく、比較せらるゝやうになつたサンスクリット語の研究さへ、その緒について居らなかつたので、デニ、ペロンの困難も思ひ遣られるのである。

次に、獨逸のポップ (Francis Popp) が、初めて、所謂アリヤン語系に屬する言語の比較文法を著はした。けれども、彼の著書に説かれたる餘りに獨斷的な推定は、今日その著述の權威を失はせる原因となつた。當時、獨逸には未だ一片の「アヴェスタ」寫本さへなかつたので、スピールゲル (Friedrich Spiegel) は、バザリアン政府の助力を得て、英佛兩國にある「アヴェスタ」の斷片を寫し、獨逸語の翻譯を加えて出版した。同時に、ブロックハウス (H. Brockhaus) は、「アヴェスタ」の一部の翻譯と註釋に字引とを加えて出版し、獨逸の學者間にも、

廣く研究せられるやうになつた。又、デンマークのウスタールガード (N. J. Westergaard) は、當時未だ研究の進んで居らなかつたパーラヴィー語の研究に貢献し、文法の概略を公にした。又、彼はスピールゲルと前後して、「アヴェスタ」寫本を出版したが、彼の寫本には、現今尙、最古の「アヴェスタ」斷片として知らるゝ、西紀千三百二十三年の寫本をも包括し、當時知られて居つた原文及び寫本が全部が参照せられたので、兎に角「アヴェスタ」全編と稱せられたものであつた。

斯くして研究も徐々に進み、第十九世紀の中頃には、スピールゲルの比較研究の結果、ガーサーは「アヴェスタ」の他の部分と異なることが明白となり、前後して、ユステイ (F. Justi)、ハーラー (O. de Harlez)、ウエスト (E. W. West)、メルメストッター、ゲルドネル (K. F. Geldner)、ミルス (L. H. Mills) 等の學者が、歐洲の學界に現はれ、アヴェスタン、パーラヴィー兩語の研究に勵むやうに

なつた。而して、今日までに出版せられた「アヴェスタ」全書としては、獨逸のゲルドネルの出版したる寫本を以て第一とし、ウエスターゲルドのもの之れに次ぎ、翻譯者としては、バローラヴィー語の遺作を譯したウエスト、「アヴェスタ」を譯したダルメストゥテール、ミルス等を以て泰斗と仰がなくてはならない。勿論、彼等の翻譯にしても決して完全なるものとは云へず、今日尙論議批難せらるゝ多くの點があるのである。

翻つて、第十九世紀の初め、獨逸のグロテフェント (G. F. Grotefend) は、已に述べたサシーのバローラヴィー碑文解讀に依り、アカメニアン朝の楔形文字の碑文解讀に着手したが、サセーニアン朝のバローラヴィー碑文は、アカメニアン朝の楔形文字碑文に擬した點が多い爲め、グロテフェントが後者を解讀するに際して大なる助となつたのである。同時に、英國のローリンソン (H. C. Rawlinson) は、獨逸に於けるグロテフェントの研究を知らずして、ベルシャに在つて、獨立

に楔形文字の碑文解讀に従事して居つた。引き続き、ラッサン (Ch. Lassen)、ブーレンフ等、同碑文研究に力を盡し、楔形文字の一字一字が討議せられて、漸く二千三四百年以前に彫刻せられた碑文も解讀され、その當時の事狀を、了解し得るやうになつたのである。

斯の如くにして進んだベルシャ語各期の研究中、最も不完全なるは、中世期のベルシャ語、バローラヴィーの遺作研究であるが、次いで問題の多いのは、アヴェスタン文學である。流石に資料尠き楔形文字の遺跡研究は、今日までに發見せられたる遺跡全部に亘りて、殆ど完成とも稱し得る域に達して居るのである。近世ベルシャ語の諸作に至りては、語根をインド、イラニアン系統に置くものと、セミテック系統に屬する語との混同こそあれ、古代、中世期の言語と異なり、亞刺比亞語の研究に連れて、文法辭書も完成し、容易に了解し得るやうになつて居るのである。



DARIUS HUNTING LIONS.
(Agate cylinder seal in British Museum.)

アカメニアン朝の遺跡

以上に予は、ペルシヤ文學史考の前提ともなるべきものを述べたが、之より各時代に亘つて、更に詳しく述べやうと思ふ。

既に緒論に於て述べた如く、ベルシャ語の遺跡としては、銘刻された當時より今日まで數千年間、如何なる變化をも加へられずして、古代の言語を其儘に傳へたアカメニアン時代の碑文等が、最も純粹なる價值を有するものである。一部分の學者が、ベルシャに於て最古の作なりと説くゾロアスター教の教典「アヴェスタ」も、現今存在する形にては、最も古く寫されたる部分すら西紀千三百二十三年に屬するものであつて、到底アカメニアン朝の碑文の比でないのである。更に、此等二者に用ひられたる文字の異なる事は云ふまでもなく、文字の配列法より見るも、アカメニアン時代の遺跡がアヴェスタン文學より古きに屬することが證明される。乃ち、アヴェスタン語の文字は、セミチック語の影響を受けたるベルシャ中世期以後の文字の配列法に従ひ、右より左に向つて横列に並べ

られてあるのである。然るに、アカメニアン時代の文字は、歐洲諸國語の基礎とも云ふべきサンスクリット語の文字配列法に等しく、左より右へと横列に書かれてある。乃ち、インド、イラニアン族が、未だ東西に分離せざりし以前の習慣を保つて居つたのである。尙、更に、アカメニアン時代の言語と、アヴェスタン文學中古きに屬するガーサー語とが、「アヴェスタ」の他の部分の言語よりも、一層密接なる關係を有する處よりしても、此朝の遺跡が古いことを容易に解し得るのである。

この、最古に屬するアカメニアン時代の碑文は、今日尙その大部分が鮮明で、比較的完全に保存されてあるけれども、後世に彫刻されたる碑文に限つて、痛く磨滅され、不明瞭となり、却つて解讀に困難であると云はれて居るが、之れは勿論、各時代の技巧の如何に大なる關係もあり、又一面、文字の形に依るのである。乃ち、アカメニアン時代の楔形文字の形は、直線的であつて、曲線多

き他の時代の文字に比較すれば、雨水の影響も左程になく、永き年月を経る間には、其の腐蝕する程度に著しい差異を生じたのであると思ふ。

扱、アカメニアン朝は、西紀前五百五十年頃、ペルシヤの南部に起つたサイラスが、當時北部に勢力があつた、彼の所謂メディア王國を征服して創立した王朝であるが、國勢が最も發展してその頂上に達したのは、サイラスの後、一代を隔て、王位に登つたダリアス(Darius)王の時代であつた。

此時代の歴史に就いては、かの希臘のヘロドトス(Herodotus)を始め、多くの史家によつて詳しく記されて居るけれども、彼等の文飾ある筆蹟を何處まで信頼してよいか疑問である。然し、ダリアス王以降の諸王が、彼等の覇業を後世に傳へん爲め、自ら命じて、處々に彫刻せしめたる楔形文字の碑文には、最も信ずべき事實を傳へて居ると思ふ。予は此時代の言語を最も正確に遺して居る其等の碑文に就き、此章に述べやうと思ふのである。

此楔形文字を以て書き表はされたる言語は、インド、ユーロピアンの系統のイラニアン族に屬するものである。佛國のオーベルの説に依ると、此文字は、始めアッシリアの表意的な楔形文字に基き、かのメディアが滅された頃、作られたものであると云つて居る。此等二種の楔形文字を比較して見ると、アッシリアの楔形文字は、埃及の形象文字の如く數多く、又漢字の如き性質を持つて居るものであるが、アカメニアン朝の文字は、三十六の字母と、碑文中に繰返さるゝ天、地、王、及びゾロアスタール教の神アウラマヅダ等を意味する四つの表意的略語、及び數字より成立つて居るのである。勿論、此等三十六の字母は、歐洲諸國のアルファベットとは、全くその趣を異にし、我が假名文字の如く、寧ろ音節とも呼ぶべき性質のもので、母音の異なるに従つて、特種な形を有して居るのである。此等アカメニアン朝の文字を以て綴られたるベルシャ語の文法は、時代の變遷に伴ふて變化した形を除いては、殆ど規則正しく、アヴェスタ

文學中最も古き部分であるガリサー語に現はるゝ文法に、類似して居るのである。

是より、其等の碑文を解讀するに至つた徑路を少しく述べて見たいと思ふが、最初、此朝の首府パーセボリスの古跡に發見せられたる碑文の研究と、ピストム巖上に發見せられたるものゝ研究とは、各々獨立して進行したのであつた。

パーセボリスに於ける碑文の存在は、最初、フランシスカンの牧僧オドリクス(Odoricus)が、西紀千三百二十年頃、パーセボリスを旅行した時の紀行文に依つて世に公にされたのである。勿論其頃には此等の碑文が如何なるものであるかとも知る者がなかつたのである。飛んで、西紀千六百〇二年、葡萄牙のアントニオ・ド・グouveia (Antonio de Gouvea) が、同じくパーセボリスを訪ふた時の記録に、「三角の文字」を發見したと云ふことを報告して居る。是より二十五年後、英國のトーマス・ハーバート (Thomas Herbert) は、未だ壯年に達せ

ざる身を以て、此パルセポリスに來り、三行の碑文を寫して歸り、眞僞を混同せる彼の研究を發表した。それから、歐洲各國の學者が競争して、或は碑文を寫し、或は實地に踏査し、或は他人の研究を批評したりなどして、一語一句の解讀に熱中したのである。斯くして、或學者は、碑文が三つの異つた言語にて書かれて居ると報告し、或研究者は、碑文が漢字の如き表意的な文字を以て綴られて居ると公表し、又一人は、碑文が三種の相異つた綴方で書れてあつて、その中、最も簡單なる綴方、乃ち、ベルシャ語の楔形文字には、四拾二の異なる記號があると説き、又或者は、一語一語を區劃する記號を發見し、或は自らベルシャに赴き、未だ見出されなかつた碑文の發見に努力して、一時、該碑文の研究は學者間に大なる興味を興えたのであつた。

更に吾人は、獨逸のグロテフエントの碑文解讀と、英國のローリンソンの碑文研究に就いて、彼等の徑路を辿つて見たい。既に緒論に於て述べたやうに、佛

國の下、サシロは、かのデニ、ペロンの「アヴェスタ」研究に基き、ベルシャ中世期の官語として用ひられたる、パトラヴィイ文字の碑文解讀を公にした。その碑文の書方に、一定の書式あるを發見したるグロテフエントは、之れを、アカメニアン朝の碑文に應用して、解讀に従事し、後者の碑文中に繰返さるゝ、王を意味する一語「クシャヤシャ」を、先づ解讀した。續いて、類似せる短き碑文二行を對照して研究し、解讀したのは、西紀千八百〇二年であつた。その結果に依ると、此等の二行は、

「ダリアス、偉大なる王、諸王の王、ヒスタスベス(Hystaspes)の子」

「ゾレキセス、偉大なる王、諸王の王、ダリアスの子」

と云ふ意味であつた。

然るに、此のグロテフエントの解讀は、當時の學者一般に認められず、却つて嘲弄の的となり、その研究を出版することすら出來なかつた。漸く、西紀千八

百十五年に至り、一友が他の研究を公表するに際し、厚意によりその卷末にグロテフエントの該研究を印刷することになつた。斯る悲痛な有様であつたけれども、兎に角楔形文字の碑文解讀上、是迄にない一大進歩であつたのである。その後、文法上の諸問題も漸次に解決せられ、又不明なりし語も解讀の途にあつたが、主に、古都バールセボリス附近に見出されたる碑文を資料として研究せられたので、バールセボリスより、西北數百哩に位するピストゥム巖上の大碑文の研究は、全く獨立して進行したのであつた。

抑も、ピストゥム巖上の大碑文は、斯る古代の作業としては奇蹟とも思はるゝ程の一大事業であつて、當時の文化の一端を察するに餘りあるものである。その碑文が彫刻された岩山は、ペルシヤの西部、カーマンシャー (Karmanshah) 平原の一方を圍む丘陵の末端に位し、殆ど三千七八百呎の高さに聳ゆる、凹凸極まりなき山である。其の麓には、清く澄み渡つた泉が湧き出で、有史以前よ

り幾多の旅人の渴を癒した好地がある。而して、此清泉とピストゥム岩山との間には、バビロンよりエクバタナ(今のハマダーン)に通ずる道路があつて、路傍には旅隊宿^{キャラヴァン}が設けられてあるのである。而して、過去數千年來吾人にアカメニアン朝の歴史を語つて居る大碑文は、此岩山の一面、地上より五百呎の高さにある斷崖絶壁に彫刻されてあるのである。

此巖上の彫刻は、碑文と彫像の二種より成立つて居る。彫像は、ダリアス王が二人の侍者を従へ、彼の左足の下に、踏み倒されたる一人の捕虜と、兩手は背後に縛せられ、頸は繩を以て珠數盤ぎにされて索き出されて居る九人の他の反逆者とが、彼の目前に並んで居る有様である。又、王は右手を舉げて、反逆者の並んで居る上部に彫刻されたる、ゾロアスター教の神アウラマヅダを招願し、捕虜一人々々の名を呼び、彼等嘘言せる由を上告して居るのである。碑文は、その彫像の直下に、古代ペルシヤ語の楔形文字を以て五欄、その碑文に引き

續いて、左側にネオ、エラミティック (Neo-Elamitic) の楔形文字の碑文三欄が銘刻されてある。その外、バビロニアン楔形文字の碑文が、後者の直上に位する少しく不規則な岩の二面を蓋ふて居るのである。此等三語の碑文には、ダリアス王の偉業が殆ど同様に記されてあるのである。彫像の右側には、四欄に亘る平面があるが、或は何かの碑文が銘刻されてあつたのかも知れないが、既に磨滅して、殆どその跡を遺して居らないのである。

扱、此ピストゥム巖上の彫刻に就いて、最も古く書いて居るのは、西紀前第一世紀頃、希臘の史家ディオドルス、シクルス (Diodorus Siculus) の遺著であるが、その記事に依ると、此等の彫刻は、アッシリアの女王セミラミス (Semiramis) の事業であつて、彼女がバビロンよりエクバタナに到る途上、此清泉の邊に天幕を張り、花園を造つたこともあると誌し、又彫刻中のダリアス王は女王の像であると説き、碑文はシリア語を以て書かれてあると云ひ、又アレキサンダー大

王も此麓に來たことがあるなどと、事實より遙かに遠いことが記録されて居る。其後、第十七世紀の後半期に到るまで、同彫刻に注目する歐洲人はなかつたやうである。此時、伊國のベムボー (Ambrogio Bembo) は、此彫刻に就き、更に良き記事を掲載した旅行記を出版したが、以來、二三の旅行者により、種々なる想像説を加へた紀行文も公にされた。

降つて西紀千八百二十二年に、英國のカーン、ポーター (Robert Ker Porter) は、其等の彫刻を、アッシリアの王シャルマナサール (Shalmaneser) が、イスラエル (Israel) の十族を平定した記念であると述べ、更に「矢の形をした文字」は、誰か勤勉なる學者の解讀を待つより外ないと書き加へて居る。斯の如く、幾度となくアッシリアの記録であるやうに過られた程、全部の彫刻が技巧の上から見て、アッシリアの影響を受けて居ることが、容易に知ることが出来るのである。

此ビストゥム巖上の碑文研究が、未だ緒に着かず彷徨して居る西紀千八百十年、ローリンソンは、英國に生れた。彼は十八歳にして東印度商會の一員として印度に渡り、西紀千八百三十三年に軍事顧問として、ベルシャに赴いた。彼は寸暇を利用して、ハマダイン附近にあるエルヴァンド (Elvand) 山谷に銘刻せられたる二つの碑文を寫し、之等を對照して、獨立の研究に著手した。その結果、此等二つの碑文は、數語を除き各々殆ど同様な書方であることを發見し、嘗て歴史より學び得たる王名を其等の異なる文字に宛嵌め、漸く碑文解讀の端緒を得たのである。西紀千八百三十五年、彼は公務を帯びてカールマンシャーに派遣せられたのであつたが、休暇毎に殆ど二十哩も隔つたビストゥム岩山に來り、ベルシャ語の楔形文字を寫し始めた。程なく、彼はアフガン戰爭に従軍した爲め、一時碑文研究を中止するの止むなきに至つたが、戦後、軍功に依り昇進せし地位をも捨て、西紀千八百四十四年、彼は再び此地に戻り、ペリシャ語と、ネオ、

エラミティック語の楔形文字碑文を寫し終へた。二年後、彼はベルシャ語の碑文全部を翻譯して、之れを公にし、ネオ、エラミティック語の碑文は、彼の一友モリス (Edwin Morris) によりて譯せられ、出版せられるやうになつた。西紀千八百四十七年、ローリンソンは再びビストゥムに現はれ、バビロニアン語の碑文を寫して、自ら之れを翻譯した。斯して彼は前後三回、年を改めてビストゥムの斷崖に來り、銘刻されたる碑文の全部を謄寫したのであるが、その間に彼は幾度となく生命を賭するの危険に遇遭したので、自ら碑文の下に己の姓名を刻んで紀念としたと云ふことも、彼の努力に比すれば、決して誇大なことでないと思ふ。その後、西紀千八百六十九年、スエズ運河の附近に、アカメニアン時代の碑文を有する石碑を發見したオーベルの如き、エルヴァンド山谷に於けるザルキセスの碑文を公にしたブルムフの如き、カールマン地方にダリアスの碑文を見出したゴビノー (J. A. de Gobineau) 等、現れ出で、又、ローリンソンの發表せ

る研究中不可解なりし部分を訂正したジャクソン博士、英國博物館より派遣されて精密に調査を遂げたキング (L. W. King)、トムソン (R. C. Thompson) 兩氏等幾多の篤學者が、永い年月の間怠なき研鑽の結果、今日迄吾人に供給された古代ベルシャ語の資料は、容易に解し得られるやうになつたのである。

更に、キング、トムソン兩氏が、ピストゥム巖上の彫刻に就き調査せる處を讀んで見ると、已に略述せる彫像の部分は、高さ十呎、幅十八呎の間に刻まれてある。又、其中で最大なるはダリアスの像で五呎八吋、次に二人の従者は四呎十吋、ダリアスの前に立つ捕はれたる反逆者の大さが三呎十吋である。最後に立つ捕虜は、後代に刻まれたものと、一般から認められて居るが、少しく形を異にし、三角形の帽子を被つて居るのである。従つて、高さも全體で五呎十一吋あると報告されて居る。捕虜の上部に彫刻されてあるゾロアスター、教の神、アウラマツダの高さは、僅に三呎九吋であるけれども、背光の長さは四呎二吋

に亘つて居ると記してある。碑文の寸法に就ては、次の如く記録して居る。前述の彫像の直下にあるベルシャ語の碑文中、最初の四欄は、高さ十二呎内外、幅六呎内外の面積を有し、第二欄のみは高さ幅とが五呎内外の面積を持つて居る、ネオ、エラミティックの三欄は、何れも前述のベルシャ語の碑文の最初の三欄と殆ど同じ面積に刻まれ、バビロニアンの碑文は、已に述べたやうに、高さ幅とが不規則なる岩の二角に銘刻されてあるのである。字と字との間にも、行と行との間にも、充分の間隙が残され、又、一語と他語との間には、區劃する特別なる記號を用ひて、斯る古代の作業としては珍しき程、當時の明確なる技能を示し、稀にその比を見る程鮮明なる跡を、今尙その一部に遺して居ると記されて居る。更に彫像の右側には、最早磨滅した、高さ十呎、幅二十一呎の面積がある。此處には嘗て四欄の碑文が刻まれてあつたやうな形跡があり、遺れる二三字より判断して、少くともその一部には、ネオ、エラミティックの碑文が

銘刻されてあつたと、一般から推測されて居るのである。

茲に、特に注目すべき事實は、此等のアカメニアン時代の碑文が、その長短に拘らず總て、ベルシャ語、ネオ、エラミティック語、バビロニアン語の三種の楔形文字を以て、同様の記録を書して居ることである。その理由は、勿論、彫刻されたる碑文の内容を、當時可成多くの人に讀まれるやうにと望んだからであらうが、又、一方から觀察すると、一時ベルシャの西南部に覇權を握つて居つたエラム朝の餘力、及び、バビロニアンの勢力を當時尙無視することが出来なかつた様にも思はれるのである。兎に角、其等三種の楔形文字碑文を有する此時代の遺物として現存するものは、大碑文を以て知らるゝビストゥム巖山と、パー、セポリス、スーサ等の宮殿の廢址に遺れる石柱及石階、スエズ、又はヴァン(Van)に發見せられたる記念碑等の外、今日歐米の博物館に藏せらるゝ土製の花瓶、分銅、印章等である。

更に進んで、此等に銘刻されてある碑文に就き詳しく研究して見る。先づ、土瓶の碎片にある銘には、何れも單に「ザールキセス大王」又は「アールタザールキセス大王」と刻まれてあるのみであるが、中には、特に埃及の象形文字の銘が書き添へてあるものもある。目下、ロンドン、パリ、フィラデルフィア、ベルリン、ヴェニス等の博物館に保存されてある此等の土瓶は、皆ザールキセス、アールタザールキセス時代の遺物のやうである。

次は分銅にある銘であるが、此等は多くダリアス時代に製造せられたるものと見え、三種の楔形文字を以て、

「貳カールシャ。我はダリアス、偉大なる王、ヒスタスベスの子、アカメニアン」。

と云ふ銘がある。貳カールシャ(Karsha)は、今の二千五百七十三グレインズ(我が四十匁餘)に相當する重量である。

印章で目下知られて居るものは、米國のトールマン (Herbert C. Tolman) の述べて居る處では六個あるやうである。その中、解讀せられた印章は二個で、一つはダリアス王、他はザルキセス王に屬して居つたやうである。破損した他の四個に刻まれてある楔形文字は、未だ解讀せられず、従つて何れの王に屬したものが知る由もないのである。目下、ロンドンの博物館に保存されてある印章は、ダリアス王が使用したものであつて、小さき圓筒に、王が兵車に乗つて獅子狩をして居る彫刻があり、三語の楔形文字で、「我はダリアス王」と云ふ銘が刻んであるのである。

既に述べたやうに、サイラスは實にアカメニアン朝の始祖と稱せられた王であつた。然し、彼の碑文として現存して居るものは殆どない。唯、彼の宮殿があつたバサール・ガダイ「今のムール・ガープ (Murgah) の附近」の此處彼處に立ち遺つて、昔を偲ばしむる石柱の或ものに、「我はサイラス王、アカメニアン」と

楔形文字の銘がある位のものである。又、その宮殿より程なき處に、サイラス王の墓がある。希臘、又は羅馬の史家の傳ふる處に依ると、その墓にペルシャ語で「我はサイラス、諸王の王」と云ふ銘があつたと述べ、又、かのアレキサンダー大王が更に希臘語で碑文を書き加へたと誌してある。けれども、ジャクソン博士の最近の踏査に依ると、今日では何れの文字の跡をも遺さず唯、墓の入口の上に、元、銘があつたらしく思はるゝ間隙を認めたと云つて居る。又、アレキサンダー大王と共に遠征した希臘史家の記事に依ると、アレキサンダー大王が此墓を訪ふた時には、既に其内に保存されてあつた貴重品は勿論盗み去られ、死體さへも外に堀り出されてあつた。それを大王の命によつて棺に戻し、元の状態に復して墓の扉を密閉せしめたと誌してある。然し、已に緒論に於て述べたやうなアレキサンダーの種々なる暴行と思ひ比べ、果して此史家の叙述は信を措くに足るものであるか否やは、疑問で、寧ろ、大王が己の罪を秘さん

爲めに、斯く誌さしめたやうにも思はれるのである。

目下行衛不明となつて居る今一つの碑は、元カーマン附近の神殿に保存されてあつた、尖塔形のもので、僅に高さ四呎で四角な底の一邊は三呎半と云ふのである。その三面には、かの三種の語を以て同意の碑文が銘刻されて、

「我はダリアス、偉大なる王、諸邦の王、諸邦の王、此地の王、ヒスタスベスの子、アカメニアン」、

と書いてある。

次に、吾人の興味を索く碑文は、今のスエズ運河より百三十三キロメートルを隔つるシャルフ (Shaluf) 附近にある石碑に刻まれたるものである。此石碑は、埃及のナイル河より紅海に開鑿せられたる運河の完成を記念する爲めに建てられたるものであるが、立てる二人の彫像の間に、「ダリアス」と刻み、その像の右側にベルシャ語、左側にはネオ、エラミタイクとバビロニアンの楔形文字

を以て、

「ダリアス大王、諸邦の王、諸邦の王、此大いなる地の王、ヒスタスベスの子、アカメニアン」

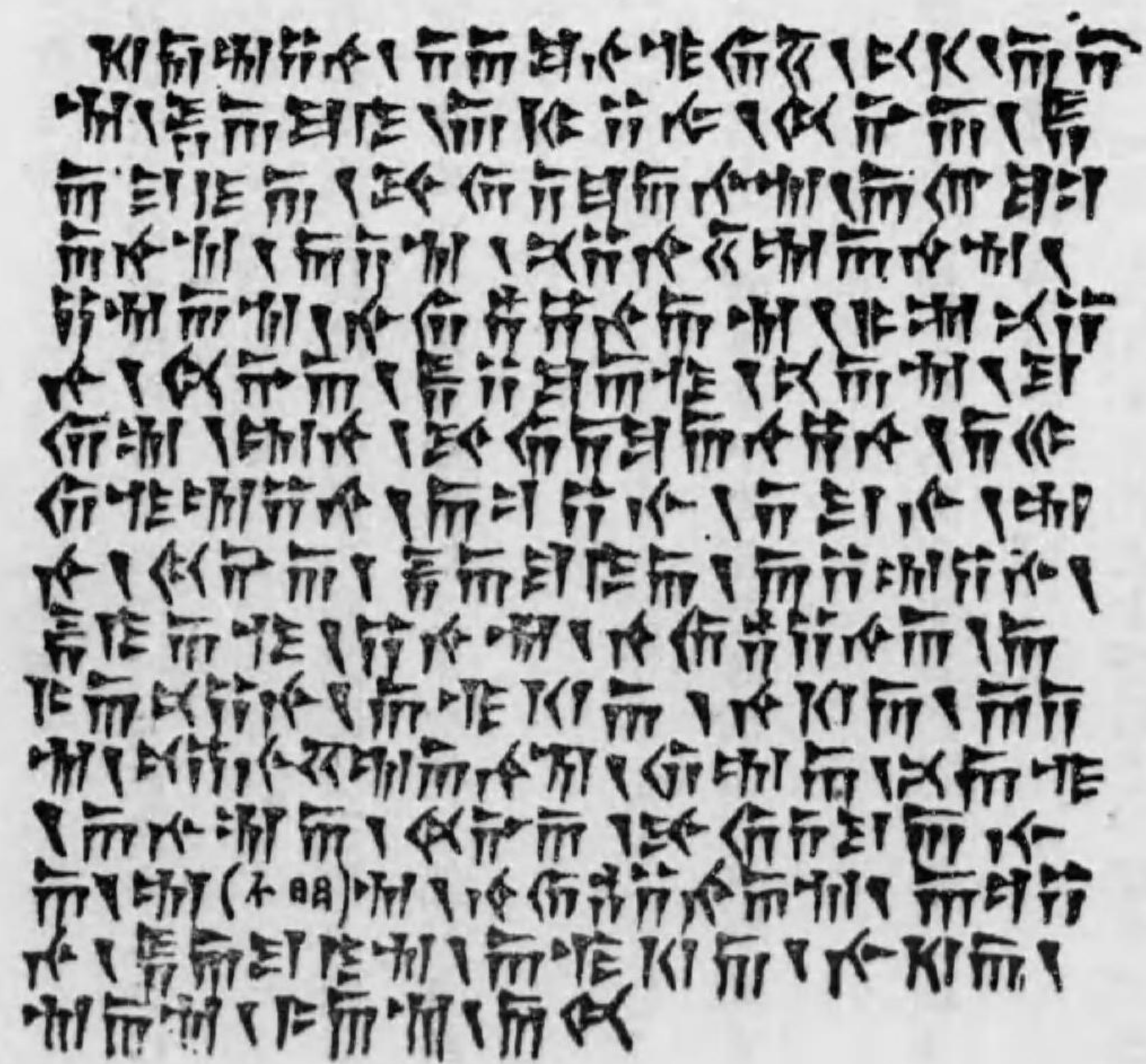
と云ふ碑文が銘刻してある。その石碑の裏面には、表面の残部に、三種の楔形文字を以て書かれてある碑文と同意のものが、埃及の象形文字を以て銘刻されてあるのであるが、その表面のベルシャ文に曰く、

「大なる哉、アウラマツダ、此地を創造り、かの天を創造り、人を摸造り、人に平安を降し、ダリアスを王と命じ、ダリアスに王領を給ふ、良き馬と良き人ある大いなる王領を。」

我はダリアス、偉大なる王、諸邦の王、總ての人を有する諸邦の王、遠く且宏き大地の王、ヒスタスベスの子、アカメニアン。

曰くダリアス王、我はベルシャ人、ベルシャより我埃及を征略し、埃及に流

る、ナイルと稱する河より、ペルシャに至る海に運河を開掘することを命ぜり。我が命ぜる如く運河を開鑿して後、此運河により我意の如く船舶埃及よりペルシャに通ず」と。蓋し、其語句簡明にして云はんと欲する所を遺憾なく表示し、純粹にして意志的なる彼の爲人を想像するに充分なる資料を與えて居ると思ふ。



ハマダン附近のエルヴァンド山谷の岩壁に彫刻されたるものは、土人呼んでガンジ、ナマー (Ganj-namah) と稱して居るが、その意は「寶の槩」とも云ふべき語で、此碑文を解讀し得たるものは、秘藏されたる寶庫に到る秘密を知ることが出来る、彼等が信じて居つたものである。然し、此等はダリアス、ザルキセス二王の碑文であつて、一尺程の距離を隔て、少しく上下して二つの碎文が彫刻されてあるのである。その内容は、各々の碑文中に現はる、二三の固有名詞を除きて、少しも差異がないのである。そのダリアス王の碑文に、

「偉大なる神アウラマヅダ、最も偉大なる神、この地を創造り、かの天を創造り、人を摸造り、人に平安を降し、ダリアスを王と命ず。諸王の王、君の君、我はダリアス王、王の王、人の類多き國の王、遠く宏き大地の君、ヒスタスベスの子、アカメニアン、

と銘じてある。ザルキセス王の碑文には、只ダリアスに代ふるにザルキセス

の名を以てし、「ヒスタスベスの子」とある所に「ダリアス王の子」とあるのである。此等の二碑文が、最も記憶せられるやうになつたのは、已に述べたやうに、ローリソンが此等の二碑文を比較して研究した結果、彼に楔形文字碑文解讀の端緒を與えた爲めである。

次に、今のアルメニア (Armenia) のヴァンにある碑文は、城砦の直立せる岩面に刻まれてあつて、ザルクセス王が己の父ダリアスの事蹟を記念する爲めに作つたものである。その碑文の一部は、エルヴァンド山谷にあるザルクセス王の碑文と全く同様の文を以て始まり、引き続き、

「曰くザルクセス王、我が父なるダリアス王はアウラマツダの恩寵により多くの善美を成せり。彼、此處を鑿り開く事を命じたれども、碑文を書かざりき。後、我此銘を作らしむ。アウラマツダ、神々と共に我を護り給へ、我が王領を、我が成せし事業を、」



THE GANJ NAMAH CUNEIFORM INSCRIPTIONS OF DARIUS AND XERXES NEAR HAMADAN

By the Courtesy of the Macmillan Co.

(From Jackson's Persia Past and Present)

と銘刻してある。

目下、英國博物館に保存されてある石柱の雙盤は、元、ハマダイン地方に發見せられたものであるが、ダリアスより三代目の王、アールタザールキセス第一世の宮殿の遺跡より齎したものである。その周圍には、他の碑文と同様に、三種の楔形文字を以て、慣例の書式に従ひ、「曰くアールタザールキセス、偉大なる王、諸王の王」云々と書き始め、己が家系を述べ、引續いて、

「アウラマヅダ、アナヒタ (Anahita)、ミスラ (Mithra) の恩寵により、此宮殿を造る。アウラマヅダ、アナヒタ、ミスラ、我を護り給へ。我が王領を、我が成せし事を」

と銘刻してある。特に注意を索く事實は、女神アナヒタ、及び男神ミスラが、アウラマヅダと同位に招願される程に顯著になつて來たことである。ダリアス、ザールキセスの碑文には、常に「最も偉大なる神アウラマヅダ」と銘じ、ア

ウラマツダを第一位に置き、他の諸神は、單に「諸々の神」と呼ぶに止つて居つたのである。之れは勿論、時代の變遷に連れて起つた、宗教の變轉の跡を示して居るのである。

スーサに見出されたるものにして、目下、ルーブル博物館に保管さるゝものは、今迄述べたものと大同小異であつて、特別に興味ある碑文は銘刻されてない。又、スーサ及びパーレセボリス宮殿の廢址に、或は倒れたる石柱、或は二千年來の風雨に依然として屹立する宮殿の入口、或は宮殿に導く壯大なる階段の側壁等にも、ダリアス、ザールキセス、アールタザールキセスの三王が、書き遺した碑文が多くあつて、何れも昔日の歴史を物語つて居る。けれども、以上に述べたる碑文と同様のもので、茲に特書するの必要を認めないのである。

次に、吾人の注目に價するものは、パーレセボリスの宮殿を離るゝこと數百尺の距離にあるダリアス、ザールキセス、アールタザールキセス第一世、及びアール

タザールキセス第二世の四王を葬つた墳墓である。此等四つの墳墓は、相並んで地上より數十尺の高さに、巖壁を堀つて造られたものであるが、その外見は殆ど同様であつて、唯ダリアス王の墳墓のみに、碑文が銘刻されてあるのである。先づその外見より述べて見ると、正面は十字形をなし、その中心に入口がある。而して、その入口の上には、上下二列になつて、屬國の特徴を幾分表はして居る人が多く並んで玉座を支へて居る。王は祭壇にありて聖火に面し、禮拜して居る様子で、彼の後には、二人の侍者が立つて居るのである。而して碑文を有せざる他の三墳墓は、何れの王に屬するものなるかを識別するに充分なる特徴を持つて居るのみである。

扱、ダリアス王の墳墓の入口に近き處に銘刻されてある碑文には、彼等の慣例なる書式で、先づ「偉大なる哉、神アウラマツダ」云々と始まり、エルヴァンド山谷にある彼の碑文と、寸毫も異ならない言葉の全部を繰り返し、引き続き

て「ペルシャ人、ペルシャ人の子、アリアン人の苗裔」と血族關係を強調し、更に「アウラマツダの恩寵により、ペルシャより遠き此等の地方を征略して彼等を統治せり」云々とて、バクトリア、印度、パピロン、アッシリア、アラビア、埃及、希臘等を始め、二十九ヶ國の名を列擧して居る。彼は尙續けて、

「曰くダリアス王。アウラマツダ此世の亂れたるを見し時、我に賜ひて王となせり。我は王なり、アウラマツダの恩寵に依り、我基礎の上に建つ。人に命ぜる處、彼等皆之れを我意の如くなせり。ダリアス王の統御せし國の數を限りと思はゞ我が玉座を捧ぐるもの、像を見よ、さらば彼等を知ることを得ん。一ペルシャ人の鎗は斯く遠くまで及びしことを汝知らん。一ペルシャ人、ペルシャより遠き彼の敵と戦ひしことを知るべし」、

と己か功績を述べ、之れ皆アウラマツダの恩寵に依るものと、更にアウラマツダの王家及び王領に對する保護を哀願し、尙、

「あゝ人よ、アウラマツダの訓戒は如何なるものぞ。爾に厭はしくあらざらんことを。爾眞の途を離れざれ。又罪を犯さざれ」。

と、人を戒めて此銘を結んで居る。外に短き説明的な銘が二三、彫像の間に遺つて居るのであるけれども、特筆する程の價值あるものでないのである。

以上に於て予は、最も重要なるビストゥム巖上の大碑文を除き、アカメニアン朝の言語其儘を今日に傳えて居る、寧ろ小品に屬する資料につき述べて來たのであるが、以下に、最も代表的であつて、且つ價值ある、ビストゥム巖上の碑文を研究して、此章を終へたいと思ふのである。

予は既に、ビストゥム巖上の彫刻に就いては、その表面的な研究を終へ、又その發見以來碑文の解讀せられるまでの徑路の概略をも述べたのであるが、是からその岩面に數千年以前の昔を物語つて居る銘及び碑文の内容に就き述べやうと思ふ。先づ、彫像の間隙に刻まれてある銘を調べて見ると、ダリアス王の前

に索き出されて居る十人の捕虜の上下には、彼等各自に屬する銘があり、其處には彼等各自の名と、彼等の偽りしことゝを略記して居るのである。例へば、第三番目の捕虜には、

「此ニディントゥムーン (Nidintu-Bel) は偽れり。彼は斯く云へり、『我はネブチャドレッザール (Nebuchadrezzar)。ナブーナイド (Nabū-nā'id) の子なり。我はバビロンの王なり』」。

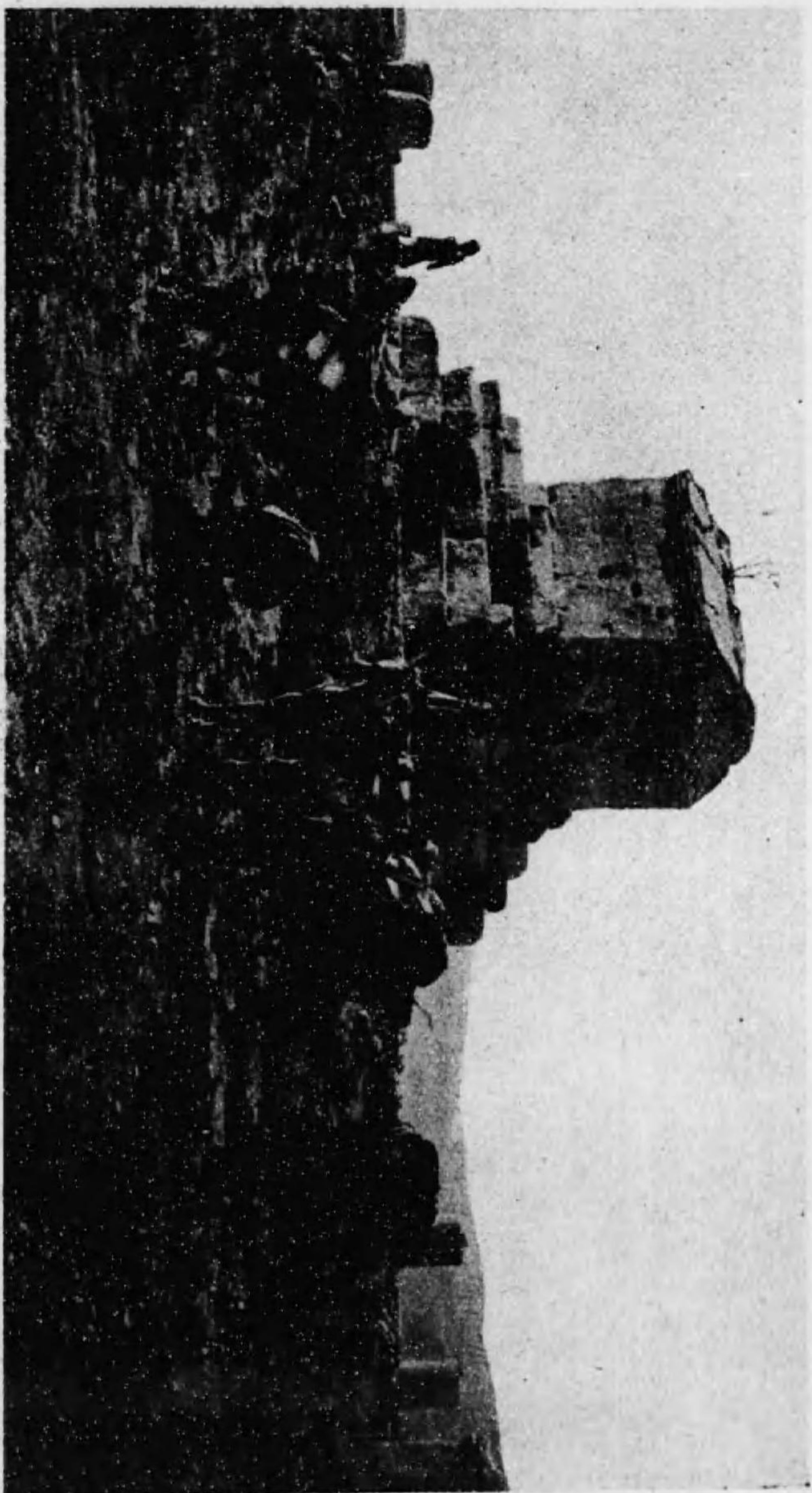
と銘してある。而して、普通ベルシャ語とネオ、エラミティック語の銘は彼等の像の上部に、バビロニアンの銘は像の下に刻まれて居るのである。唯、ダリアス王の左足に踏み倒されて居る捕虜、ガウマータ (Gaumāta) に屬する三種の銘のみは、全部彼の下に銘刻されてある。又、第四番目に居る捕虜、フラオルテス (Phraortes) を説明するベルシャ語の銘は、彼の下半身に刻まれ、最後の捕虜、スクンハ (Skunkha) にはベルシャ、ネオ、エラミティックの二種のみにて、唯、

「此者はスクンハ。シティアン (Soyūlian) 人」と、彼の像の上に刻まれてある。此等の銘に依ると、捕はれたる敵將は、ガウマータ、アリスナ (Athrina)、マディントゥペール、フラオルテス、マルティヤ (Martiya)、チスランタフマ (Cihr-rantakhma)、ヴァヒヤズダータ (Vahyazdāta)、アーハン (Arkha)、フララーダ (Frāda)、スクンハの十人で、此順序に並んで居るのである。ダリアス王に従ふ二人の侍者に就ては、如何なる銘もないけれども、彼の墳墓にある銘に依ると、ゴブライヤス (Gobryas) と、アスバシネス (Aspathines) の二人であつたやうに思はれる。ダリアス王の上には、ベルシャ語、ネオ、エラミティック語の二種のみを以て、慣例の書式に従ひ、己の家系に就き詳しく述べ、更に「斯くて我等はアカメニア」と稱せらる。我等の家系は古く、我等の二分系は王にして、我血族の八人は既に王たり。我は第九代なり」云々と誌して居る。

此「二分系」(Duvitā-paranam) と云ふ言葉は、元、曲解せられて「甚だ遠い

昔より」と云ふ意に解釋されて居たこともあるけれども、かの希臘の史家、
ヘロドトスの遺著に依り、その眞意を解し得るやうになつた。即ち、ダリア
ス王の祖先テイスベス (Teispes) に二人の子があつて、その一方の系統は、サ
イラス王の子、カムビシス (Cambyses) を以て終り、他の一人の系統に、ダリア
ス王が現はれたことが分り、又、祖先より兩系統の人を數へて、ダリアスが九
代目であることをも知ることが出来たのであつた。然し、普通歴史には、サ
イラス王がアカメニアン朝の始祖であつて、ダリアスは第三代の王となつて居
るのである。以上に述べたるものゝ外に、唯、ネオ、エラミティック語の楔形文
字のみを以て、ダリアス王の像の上に刻まれたる一文がある。その意味する處
によると、ダリアス王は他の方法を以て、各國に送り出した碑文等があるやう
であるけれども、未だ何處にも其らしきものが發見せられないのである。

予は最後に、高さ十二呎、幅六呎内外の面積を有する四欄と、高さ五呎、幅



By the Courtesy of the Macmillan Co.

THE TOMB OF CYRUS THE GREAT

(From Jackson's Persia Past and Present)

五呎の面積ある一欄、都合五欄に亘るベルシャ語の碑文を説明せんとするのである。此大碑文は、勿論ダリアス王自叙の歴史であるが、その冒頭には、彼の彫像の上に誌されたる、彼の家譜に關する銘と毫も異らぬものが繰り返されてある。それから續いて、バビロン、アッシリア、埃及を始め、二十三ヶ國の名を明記し、アウラマツダの恩寵に依り、彼の手に歸せりと述べ、彼等貢物を獻じて、日夜ダリアスの命の儘に爲せりと記して居る。進んで彼は、サイラス王の二子間に起つた軋轢を叙し、一人の子カムビシス、その兄弟バルディヤ (Bardiya) を殺して埃及に遠征したが、バルディヤの死が一般に知られなかつた虚に乗じて、ガウマータ起ちて自らバルディヤと稱し、ベルシャの本國、メディアその他の地方を略奪した、と述べて居る。さればダリアス、

「ガウマータより王領を戻し得る一人も、我家系には他に無く、(中略)我來りてアウラマツダの加護を乞ひ、(中略)數人と共にガウマータを殺し、

(中略) アウラマヅダの恩寵により、我王となれり」。
とて、如何に王位に登りしかを記して居る。彼が王となつてから、アリスナは
スシアナに、ニディントゥペールはバビロンに、反旗を翻したけれども、前者は
程なく殺され、ダリアスは後者とチグリス河に對陣した。而して、

「我、我が軍隊を皮を以て造れる筏に載せ、或る一部には駱駝を、又他の部
分には馬を載せ、(中略)アウラマヅダの恩寵に依り、チグリス河を横切り、
(中略)ニディントゥペールの軍を破り、(中略)ユフラティス河に添ふザ
ーナ(Nazana)に(中略)戦ひ、(中略)敵軍は水中に遂はれ、水彼等を
運び去りぬ。(中略)後、バビロンに來りて、(中略)ニディントゥペールを
殺せり」。

云々と、その當時の状況を物語り、碑文の第一欄が終つて居る。

第二欄には、ダリアス王がバビロンに滞在して居る間に、反旗を翻した國々

の名を先づ擧げ、之れに對する彼の處置に就いて述べ始めて居る。即ち、彼は
第一にスシアナ地方にマールティアを滅し、ヒダールネス(Hydarnes)、ダーダー
シ(Dādarshi)等の將を派遣して、屢々フラオールテスの軍をアールメニア地方に
征せしめたが、如何に強敵で、ダリアスの軍を苦しめたかと云ふことは、後、
フラオールテスが、ダリアス王の前に捕はれ來りし時、ダリアスの彼に加へし懲
罰を見ても推察されるやうに思はれる。碑文には、

「我、彼の鼻、耳、舌を截り落し、彼の眼を剝り出して我が庭に縛せり。後、
彼はエクバタナに磔にし、彼の聯盟者をエクバタナの城内に惱ませり」、
云々とある。それより、ダリアスは、將タフマスバーダ(Takmaspāda)を遣は
して、チスランタフマの亂を鎮め、彼を捕へてフラオールテスと同様な懲罰を
科した。續いてダリアスは、彼の父ヒスタスベスを助けて、パールセアンと戦
ひ、反逆を平げる處を以て第二欄が終つて居る。

第三欄には、更に父ヒスタスベスへの援助に就き書き加へ、一將ダーダシの、フラダを平定してバクトリアを領土とせしことを述べ、他の將アールタヴァルディア (Artavardiya) を遣はして、ヴァヒヅダータと彼の聯盟者とを捕へ、磔に處したる顛末を誌し、最後に、バビロンに於けるアールハを平げん爲め、將インタフローネス (Intaphernes) を送り、アールハを捕へてバビロンに磔にした條を、銘刻して居るのである。

第四欄には、

「(前略) 我、王位に登りてより十九戰に従事し、アウラマヅダの恩寵により、彼等と戦ひて九王を捕へたり、」

と誌し、再び彫像の部分に刻まれてある、捕虜に對する銘文 (スクンハの銘を除き) を繰り返し、彼等の名と、彼等の偽りしことゝを述べて、更に、

「將來王たらん爾等、固く虚言を戒むべし。詐僞者は重く罰せらるべし、

「我國安全なれ」、と願はゞ罰せよ、

と警告して居る。又引き続き、

「是、我常にアウラマヅダの恩寵によりて爲せし事なり。後の世に此碑文を讀む爾等、我が事蹟を信じ、僞と思ふなかれ、(中略) 又アウラマヅダの恩寵によりて爲せし他の多くの事にて、此碑文に書かざりしものあり、」

と誌し、その理由として、後世碑文を讀むもの、餘りに多き彼の事業により、却つて僞と思ひて信ぜざらんことを恐れたる故なりと、正直に書いて居る。ダリアスの卒直なる性質は實に面白いと思ふ。

彼は更に、此等の事は決して祖先よりの遺業に非ずして、皆アウラマヅダの恩寵により自ら成就したることであると述べ、

「爾等信じて此碑文を秘さず、他に傳へなば、アウラマヅダ爾等の友となり、家も榮え、爾等も亦永く生きん、」

然らざれば、アウラマツダ彼等を殺し、彼等の家は絶えんと威脅して居る。
又、

「我、邪惡に走らず、我、偽を語らず、我、暴君に擬せず、又我血族の者に皆然り。我正義を以て統御し、奴隸卑賤奴をも壓制せず、我が家を助けしものを敬し、我が家を破壊せんとせしものをよく罰せり」

其故にアウラマツダは、他の諸々の神と共にダリアスを保護したと銘刻して居る。又重ねて、偽を避けるやうに、後に王たるべき人の爲めに訓戒し、又碑文を毀たざるやうに警戒し、ガウマータの亂を平げた時、ダリアスを助けた六將の名を挙げ、後に王位に登るものが、彼等の家族を特別に保護するやうに希望し、最後に、既に述べた、ダリアス王の像の上にネオ、エラミティックの楔形文字のみにて刻まれてある碑文が繰り返されてあるやうである。此處は、既に磨滅して不明になつて居る語が多いのであるが、遺つて居る語より察するに、此

碑文が他の方法に依つて書かれ、諸々の國に送られたと云ふ文意であるのである。斯くして、第四欄が終つて居る。

第五欄は最も短き碑文で、先づ、スシアナ地方に於ける反亂に就て述べ、一將ゴブライアスの遠征を誌し、アウラマツダに感謝して、

「我、感謝を捧ぐ、(中略)何人もアウラマツダを拜するものゝ家は永續し、又永壽せん」

と銘じ、最後にシティアン人、スクンハの亂を記録し、再び「我、アウラマツダに感謝を捧ぐ、(中略)、何人も……」云々の言葉を繰り返して、全碑文の終結を告げて居るのである。

茲に、全碑文を通して、特徴とも云ふべき一點は、各節の冒頭に、必ず「曰くダリアス王」と云ふ句が、繰返されてあることである。この書式は、ダリアス王以後の諸王が銘刻した碑文にも用ひられてあるけれども、他の時代には比

類のない書方であると思ふ。

扱、以上に述べたアカメニアン時代の遺跡を見るに、その主なるものは、今日まで傳へられて居る範圍では、同朝の全盛時代、ダリアス王の遺物である。ダリアス王は勿論一人の勇將であつた。従つて、碑文には單に彼の軍略上の成功のみを物語つて居る。然し、碑文にもあるが如く、「碑文に記載せざりし」多くの他の事業も亦あつたのである。即ち、ダリアスは、今日のベルシャ人が思ひも寄らぬ程、壯大なる宮殿をバールセボリスに建てたけれども、その事に就ては、此碑文に一言も誌してないのである。されば、吾人はアカメニアン朝の實狀を今後の發見と研究とに大に期待するものである。又ダリアス王は、一方には軍略に長けた武人であつたけれども、その碑文に録する處に依ると、彼はゾロアスター教の神アウラマヅダを信じ、歸依し、總ての成功をアウラマヅダの恩寵に歸して居つたので、ゾロアスター教の保護に盡瘁して居つた事は云ふま

でもない。而して、彼はバールセボリスの宮殿にゾロアスター教に關する多くの記録、その外貴重な書籍等をも保存して居つた事も、他の史家の遺著に徴しても明かである。然るに、アレキサンダー大王の一夜の醉狂、或は後世の内憂外患が、記念して永く保存せらるべき多くの彼の事業を不明にし、虚無に歸せしめたといふことは、實に惜むべく且つ可歎しいことであると思ふ。されど吾人は尙、かの荒漠たるベルシャの或る地方には、未だ昔を物語る遺跡を秘し、又ダリアス王が他の方法を以て公にした事蹟の記録を、他に發見し得ることを信ぜずに居られないのである。

扱、以上に叙述して來た銘及び碑文等は、現代の或る一派の人の目には、文學的作品として、餘りに價値のないものゝやうに映ずるかも知れない。けれども此等の碑文には、素材で然かも尊嚴なる語を用ひ、簡明にして然かも誌さんと望んだことを洩さず、謙讓にして誇らず、警めんと欲した處を憚らず戒めて、

良くアカメニアン朝の昔を語つて居るのみならず、ダリアス王以下、二三王の性格を描き、種々なる暗示を與えるものは、他に比類が尠ないと思ふのである。又、ペルシャ最古の言語を其儘に今日に傳へて來た唯一の記録として、最も忘るべからざるものである。



アヴェスタン文學の沿革

前章に述べたアカメニアン朝の碑文に依り、吾人は、同朝歴代の諸王が、ゾロアスター教教徒の崇拜する神、アウラマヅダに歸依して居つたことを知つたが、尙同時代には、既にゾロアスター教が、その根拠をベルシャに据えて居つたことをも明となつた。此章に述べんと欲するアヴェスタン文學は、そのゾロアスター教の教典「アヴェスタ」の全部を包括して居るのである。

抑も、此教典の内容は、アカメニアン朝以前の古き時代より、口碑に傳へられて來たものであるが、文字を以て現今の形式に保存されるやうになつたのは、アカメニアン時代より後のことであると云ふことは確かである。されば、アカメニアン朝の碑文が未だ解讀せられなかつた頃には、同朝の諸王がゾロアスター教の神、アウラマヅダを信じて居つたことさへも知られて居なかつたので、

ゾロアスター教の始祖ゾロアスターも、一時は單に稗史上の人物であつたやうに觀察せられ、従つて彼の教理の眞偽も亦疑問に附せられた時もあつたのである。けれども今日では、言語、歴史の研究も進んだので、彼の生涯に起つた事柄には未だ不明な點も多くあるけれども、兎に角實在した一人物として取扱はれるやうになつたのである。

既に緒論に於て述べたやうに、言語學上の見地から、アヴェスタン文學の言語は、サンスクリット語にも類似して居るが、又アカメニアン朝の楔形文字の言語にも似て居つて、語源を同くし、又兩語が使用された時も餘り隔つて居らないと云ふ説に、何れの學者も一致して居るやうである。佛國のダルメストゥター^ドの如きは、アヴェスタン文學の言語を、アカメニアン朝に先だつ彼のメディア時代の言語であつたやうに説いて居るけれども、今日存在して居る形では、アヴェスタン文學の大部分の言語は、アカメニアン時代の言語より新しく、少くとも

その外形に中世期以後の影響が明かに見得るのである。

更に、アヴェスタン文學の言語を精密に研究して見ると、三つの時代に區別することが出来る。それ等の時代を異にする三様の變化は、「ガーサー^{ハフダンハイテイ}」、「ヤスナ^{ハフダンハイテイ}七章」(Yasna Haptanhaiti)、及びその他の大部分の章に現はれて居るので、此變化の徑路は、言語學の一定の法則に準據して居るのである。而して、「ガーサー」に用ひられたる言語は、三種の中にて最も古きに屬し、「ヤスナ^{ハフダンハイテイ}七章」の言語は、ガーサー語より、「アヴェスタ」の他の大部分に用ひられた比較的新しい言語に變遷する階程を示して居るものである。一部の學者——例へば白國のド、ハーレン^ド (O. de Harlez)、獨國のゲルドネルの如き——は一時、ガーサー語はバクトゥリア(往時ベルシヤの東北にありし一領土)附近の訛であつたやうに説いたこともあり、又或は——ダルメストゥター^ドの如く——メディア語であると説いたこともあつたのである。然し、既に緒論にも述べたやうに、昔はベル

シャの東西を問はず、ガーサー訛を使用したのであつたが、時代の變遷に連れて漸次に變化して來たのであると思ふ。更に之れを説明すると、ゾロアスター教の教祖ゾロアスターは、ペルシャの西北にあるウルミア(Drumiah)湖畔の古都ウルミアに生れたのであるが、最初の彼の教理宣傳に成功したのは、生地より程近き、ペルシャの東北に位したバクトゥリアであつた。ゾロアスター教に歸依したのは、當時バクトゥリアの王であつたヴィシタスバ(Vishtaspa)を以て嚆矢とする。さればゾロアスター存命時代は、彼が用ひたと稱せられて居るガーサー訛が、バクトゥリア附近に於ても了解せられ、又ペルシャの到る處に通用されたのであると思ふ。斯くしてガーサー語が、アヴェスタン文學の他の部分の言語よりも、ペルシャの西部に根據地を持つたアカメニアン朝の言語に類似して居ることも解釋出来ると思ふのである。

又、西紀前數百年の昔より、ゾロアスター教の教理を信じたものゝ口に綴り

返された此等の教文は、アレキサンダー大王の侵入、並に後世の擾亂の爲めに破滅せられなかつた以前、如何なる文字を以て綴られてあつたかは、今尙知る由がない。兎に角、現今保存されてあるアヴェスタン文學を傳へて居る文字は、セミティック語系の影響を受けて居ることが明かであり、又現存して居る「アヴェスタ」は、昔時の「アヴェスタ」原本の一小部分に過ぎないことも亦確かなのである。されば、パーセアン朝の王ヴォロゲセス(Vologeses)第一世は、西紀第一世紀の頃、最初のアヴェスタン文學を復古せんと志して、教典の蒐集に着手し、西紀第四世紀頃ペルシャを統御して居つたサセーニアン朝のシャープール(Shapur)第二世に至るまで、その事業が繼續せられたやうであつた。殊に、サセーニアン朝の始祖アーダシールは、ゾロアスター教の熱心なる保護者であつて、同教の再興を計り、失はれたる教文の蒐集に大に預つて力があつたのである。けれども、昔より土着の學者に依つて文法が編輯せられ、言語が比較的

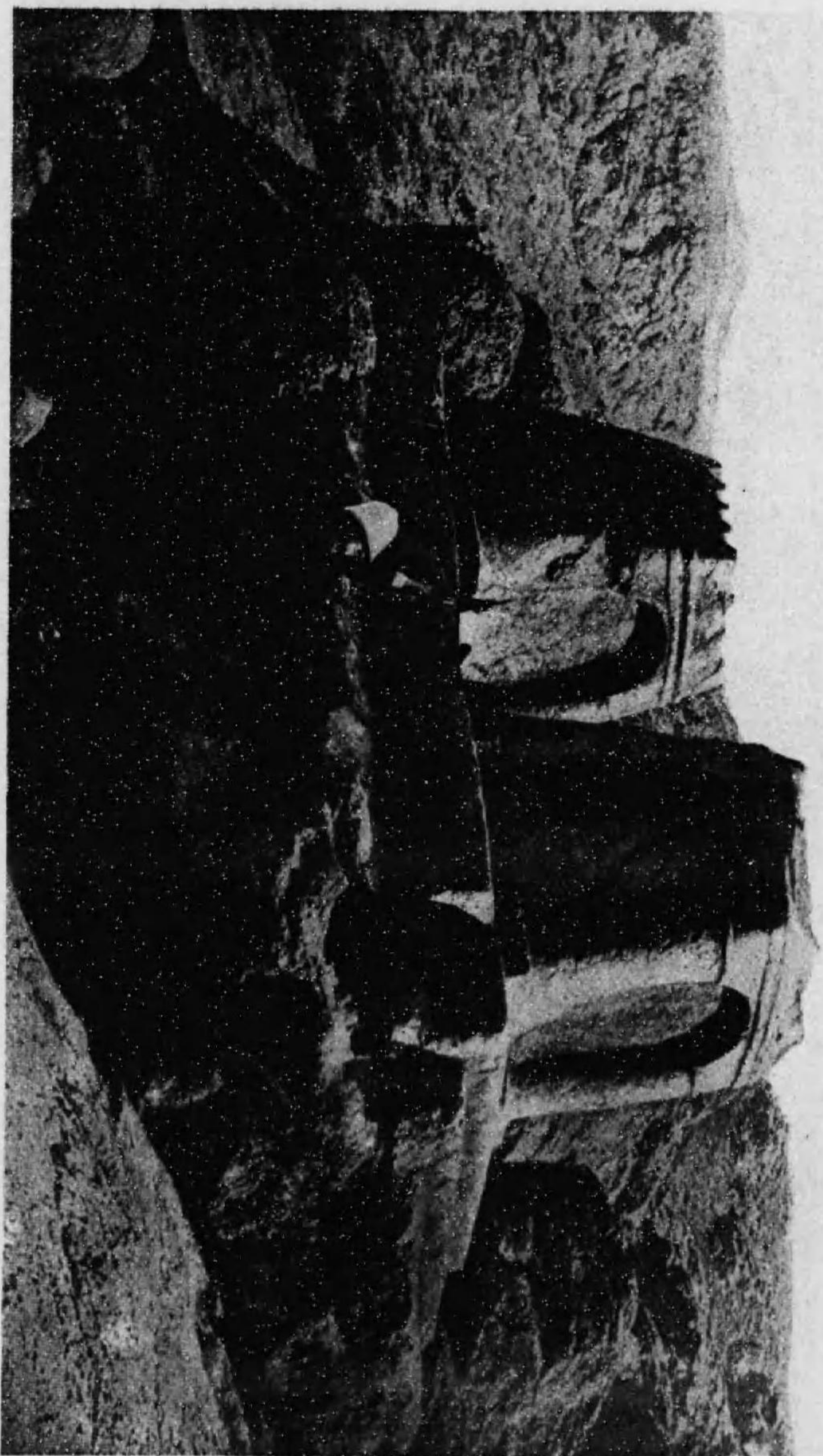
精確なる軌道に添ふたナンスクリット語とは全く異なり、アヴェスタン文學は久しく口より口に傳へられ、後世の人々の頼むべき文法書もなく、時と共に變遷せる言語は自然に不規則となつて、今日アヴェスタン文學中、解釋に苦しむ多くの點が認められるやうになつたのである。

予は既にアヴェスタン文學は、言語學から見て三種に分類することが出来る事を述べた。更に、その内容より普通次の様に區分されるのである。即ち「ヤスナ」(Yasna)、「ヴィスバラッド」(Visparad)、「ヴェンディダード」(Vendidad)、「ヤシツ」(Yashts)であるが、外に斷片的な小品もあるのである。此等の區分は、後世の學者が命名した處であつて、ゾロアスター教の初期には、「アヴェスタ」全書が二十一部に分たれてあつたことが、中世期の記録に徴して明かで、斷片的な小品は、其等の何れの部分かに屬して居つたのである。今此等の部分的研究を始むるに先立ち、アヴェスタン文學研究の徑路で、緒論に述べざりし部分を

叙して見ようと思ふ。

扱、ゾロアスター教に就き、最も古く誌して居る書は、ベルシャの文化と最も關係の深かつたヘブロー人の手になれる舊約全書である。然し、其の關係深かつたヘブロー人の、アヴェスタン文學に及ぼした影響が殆ど皆無であつたことは、該文學中に僅か二三のヘブロー語を遺して居る一事のみにも明かである。之れに反して、舊約全書中に遺つて居る多くのベルシャ語(其等が轉じて今日歐洲の諸國語に用ひられて居る)を見ても、當時ベルシャ人の勢力が如何に四隣に影響して居つたかと云ふことを容易に察することが出来るのである。次に、古くゾロアスター教に就き誌して居るのは、かの希臘の史家ヘロドトスである。彼の遺著には多く眞偽を混同せる記事が載せられてあつて、何處まで信じてよいか判断に苦しむものであるが、兎に角、彼はゾロアスター教を以てメディア人の信じた宗教であつたやうに説き、又彼は同教徒が自然を崇拜すること、癩

病人に對する嫌避すること、或は禮拜の儀式等を誌して居るのである。羅馬人
プリニー (Pliny) の歴史に依ると、西紀前第三世紀頃生きた居つた哲學者ハー
ミッポス (Hermippos) は、ゾロアスター教を詳しく研究して、多くの書を著は
したやうに誌して居る。けれども、今日それ等の何れの遺著も存在して居らぬ
爲め、其等に見出し得べき多くの知識が不明に歸して居るのである。かのアリ
ストートルも、亦同教の教理を引用して居るけれども、更に詳しい記録は、ハ
リミッポスの研究に基いて書かれたブルータクタの遺書である。その誌す處に
依ると、ゾロアスター教の教理に、善惡二元の創造あることを説き、比較的
綿密に叙述して居るのである。他の一人の希臘人ダマスキウス (Damascius) も
「メディア人及び他のアリヤン人は、善の神と同時に惡魔が宇宙に顯出して居つ
て」、此等の二靈が挑戦して居ることを信じて居ると、書いて居るが、蓋し此等
の記事が、後世の學者をして、ゾロアスター教を二元教であるかの如く、説か



By the Courtesy of the Macmillan Co.

THE FIRE-ALTARS AT NAKHSH-I-RUSTAM
(From *L'Art antique de la Perse*, by Marcel Dieulafoy.)

しめるやうにしたのであらうと思ふ。又更に此二元的觀念が、サセーニアン時代の基督教徒に冷評せられ、一部の學者の頭に深く銘じて今日に及んで居るやうである。外に、ゾロアスター教、及び同教徒等に就き、斷片的な記録が此處彼處に多くあるが、希臘のストラボ（Strabo）の如きも「ベルシャ人は何れの神を祭るにも、第一に火を招願し、常に焰を絶さない」など誌して居る。斯る古い記事が、一時歐洲に於て、ゾロアスター教徒を「拜火教徒」(Fire-worshipper) と呼ばしめ、又我國に於ても、一部の人がゾロアスター教を「拜火教」と稱するやうになつたのであると思ふ。

以上に、予は古代の史家の遺著が傳えて居る記事に就て述べたが、更に近代の學者が研究して來た跡を辿つて見ると、既に緒論に叙したやうに、デニ、ペロンの獻身的研究、ハイドのゾロアスター教に關する著述等は、教典「アヴェスタ」及びゾロアスター教の研究に、歐洲學者の興味の振興に貢獻したのであつ

た。斯くて、かのサンスクリット語に通曉して居つたブルヌフは、サンスクリット語に翻譯されてあつた「アヴェスタ」の一部を読み、比較研究の結果、言語學上大に貢獻する處があつた。彼のゾロアスター教に關する知識は、寧ろ微々たるものであつた。然し彼の研究には、アヴェスタン文學を最初歐洲に紹介したデニ、ペロンの著述が誤謬に満ちて居る理由は、デニ、ペロンが、サンスクリット語の知識に缺けて居つたこと、及びゾロアスター教の無能なる牧僧に就いて學んだ結果であると、辯明して居るのである。又ブルヌフの研究は、後、ポップのアリヤン語系の比較文法に基礎を興へたのである。次に、獨逸のユステイは、西紀第十九世紀の後半期に、アヴェスタン文法を加へた辭彙を出版した。けれども、當時未だアヴェスタン語の研究も進んで居らなかつた爲め、到底完全なる辭書は出来なかつた。其外、蒐集された寫本及び其他の研究に基き、アヴェスタン文學を翻譯したダルメストゥテール、ミルスの如き、アヴェスタン文學の現存す

る全部を寫本として出版し、或は部分的研究を公にしたウエスタールガード、ゲルドネルの如き、最も精密にして然かも獨得の説を加へ、代表的の辭書を出版したパルトロメーの如き學者も現はれて、大に該研究に貢獻した。又續いて、獨乙のハウグ (Martin Haug)、英國のウエスト、モールトン (J. H. Moulton)、米國のジャクソン等も出で、該研究に忘るべからざる學者となつたのである。

翻つて西紀第七世紀の頃、亞刺比亞にはムハマド教起り、同教徒の勢力が漸次ペルシャ全土を壓するやうになつた。従つて亞刺比亞の學者の中にも、ペルシャ及びペルシャ人に就いて著述したものが多くあつた。就中、西紀第十世紀頃、ゾロアスターの存命時代を、アレキサンダー大王に先んずること凡そ二百八十年であると説いた、史家マスーディ (Mas'udi) は、彼の遺著に「ゾロアスターの書いた教典『アヴェスタ』が、ペルシャ人一般には、了解に苦しむ程難かしいものであつた爲め、ゼンド語を以て説明を書き入れ、更に、バザンド語にて註

釋を加へたのである」と、誌して居る。此「アヴェスタ」全部が、ゾロアスター自身の作であるやうに説いたのは、確かにマストーディの誤謬であつたけれども、ゼンド語及びバザンド語に對する彼の意見は正しく、兎に角、彼の遺著は、ゾロアスターの教のみならず、ペルシャに關する他方面の研究にも、多くの資料を提供して居るのである。最後に、古來ゾロアスターの教を遵奉して、漸く其餘喘を残して來たペルシャ人の間にも、西紀第十九世紀以來、教典及び其他の研究が盛に提唱せらるゝやうになり、多くの書冊が公にされるやうになつた。

斯くの如く、アヴェスタン文學の研究が進んで行く間に、自ら二つの學派が出来るやうになつた。その一派は、眞偽に係らず、アヴェスタン文學の寫本にある事項を、文字通に解釋した因襲學派であつて、獨逸のスピートゲル之れを導き、他は、比較學派で、アヴェスタン語の姉妹語たるサンスクリット語と、アヴェスタン文學中の多くの疑問を解決するに益した中世期のペルシャ語、パーラグイ

とを比較して研究する學派で、獨逸のハウグ等が、此學派に屬して居つたのである。その結果として、因襲學派は、寫本又は翻譯の出版、並に文法の編纂に傾き、比較學派は、インド、イラニアン比較神話の研究に先鞭をつけ、各派獨特の説を立て、いづれも今日の研究に大なる貢獻をして居るのである。

扱、是より、其の内容に依つて分類せられた「ヤスナ」以下四部の特質に就て述べ、續いて、部分的研究を試みたいと思ふ。元來、「ヤスナ」と云ふ言葉は、サンスクリット語の「ヤジニヤ」の變化したので、禮拜ウカールン又は供御サクリフを意味して居るのである。而して、其の「ヤスナ」の部は、神靈、又はその他諸々の「善の表象」を祭る爲めに用ふる、禮拜上の祈禱文、儀式、及び供物等に關して書かれて居るのである。處々に同一な句、或は章が反復されて、意味ありげに七十二章より成立つて居るのである。されば、或る學者は、此七十二と云ふ數はゾロアスターの教の神、アウラマツダが、此世を六期に分ちて創造した、その時

期の倍数であつて、その區分に何等かの意味を含んで居るかの如くに説き、又、他の學者は、禮拜する爲め、ゾロアスター^ルの會堂に出入するには、七十二線よりなる「聖帶」を所有しなければならぬが、此「ヤスナ」七十二章の區別は、その聖帶の線數に因んで居るのであると、説いて居る。然し、未だ其の眞意は解されて居らないやうである。

此「ヤスナ」の一部に名けられて居る「ガーサー」と云ふ言葉は、印度の言語にも廣く知られて居る「頌」と言ふことであつて、その文句は、一種の音律に添ふて居るのである。勿論、別に韻を踏んで居る譯でもなく、只、五集に分たれて居る十七章の「ガーサー」が、各異つた音節シラブルの數で、音律を作つて居るのであつて、主に、サンスクリット文學中の最古き「ヴェーダ」の音律に類似して居ると云はれて居るのである。次は、「ヤスナ」七十二章の内、第三十五章以下の、特別なる七章、「ヤスナ、ハブタンハイタイ」である。此「ハブタンハイタイ」

と云ふ言葉は、既に知らるるが如く、アヴェスタン語の「七章」と云ふ意味であつて、ガーサー語よりも新しく、然し「アヴェスタ」の他の部分の語より古い語を以て書かれてある散文の祈禱文である。之等は、アウラマヅダ、彼を助ける天使、アウラマヅダの表象なる焔、其他、地の神、女神、水、並に創造を助けた善性の從神等に捧げたるものであるが、教義上から觀察しても、可なりまで宗教的に啓展して來た跡が判然として居る。ガーサー時代には、存在を認められなかつた多くの新しい禮拜の本尊が、此等七章に現はれて居るのである。上述の「ガーサー」、並に「ヤスナ、ハブタンハイタイ」を除き、他の「ヤスナ」の部分は、比較的に新しいアヴェスタン語を以て書かれてある。禮拜に附随した祈禱文を始めとし、供御に用ふるハオマ汁（一種の酒）の準備等に就き、述べられてあるのである。

次に、「ヴィスバラット」は、「總ての主」と云ふ字義を有し、全部二十三章より

成り、諸々の「精」に捧げた祈文である故、或る意味から云ふと「ヤスナ」と同性質のものである。儀式の諸律と、頌讚とを集録する、此「ヴィスバラッド」は、「ヤスナ」の如く禮拜に用ひられるが、その文中に招願される實在、幻想二界の主腦者なる「精」の種類より察しても、「ヤスナ」よりも新しき變展の跡を遺して居ることが、明白であるやうである。

第三に、「ヴェンディダード」は、總ての「惡魔に對する律」である。ゲルドネルは、此「ヴェンディダード」をゾロアスター教々典中の「利未記」——舊約全書中にあるモーゼの律——とも稱すべきものであると、説いて居る。中世期のパーラヴェイ語にて書かれてある一著「ディーンカート」に依ると、初めゾロアスター教の全教典が、二十一部に分たれてあつたが、目下完全に遺つて居るものは、此「ヴェンディダード」のみであると誌して居る。全篇二十二章より成る其の「ヴェンディダード」は、潔齋、贖罪、苦行等の律を説き、古來、ベルシャ人

の宗教的生活上、懲罰の律として用ひられたものであり、又、一般人民の間に民法、刑法として遵奉されたものであつた。而して、又、次に述べんとする「ヤシツ」と共に、多くの神話が包括されて居るのである。

第四の「ヤシツ」も、祈禱文と頌讚とを聚集したものであるが、その多神教的なる點、又、神話的に人格化した多くの「精」の存在を見ても、明かに、ゾロアスター死後の啓展を示して居るやうである。

以上に簡単に説明した四部の外に、かのアレキサンダー大王が、ベルシャを侵略する以前に存在して居つたと稱せられる、最初の「アヴェスタ」二十一部中より、斷片的に遺されてある「アフリン・ガーン」(Afringān)、「ガース」(Gāhs)、「ニヤイ・シ」(Nyayish)の短き祈禱文がある。

此等の斷片的な祈禱文と「ヤシツ」とを一冊に集めて、普通、「ホルダ、アヴェスタ」(Khorda Avesta)と云ふ名稱の下に知られて居る。之れは、西紀第四世

紀の初、サセーニアン朝の王、シャールフル二世が、平信徒の使用に宛つる爲め、アーダーバード、マールスバンド (Adharpath Mahraspand) と稱する牧僧に編輯させた祈禱要句抄であると、云ひ傳えられて居る。外に、「ヴェンディダード、サーダー」(Vendidād Sāda) と稱せられる一小冊は、「ホルダ、アヴェスタ」に屬せざる他の三部、乃ち、「ヤスナ」、「ヴィスバラッド」、及び「ヴェンディダード」より拔萃した句を諸種の儀式に應じて、排列してあるものである。

是より、言語學上最も古きに屬するものより始めて、各四部に亘り、その内容を詳しく調べたいと思ふ。先づ、「ヤスナ」の内に包括されたる「ガーサー」より説明する。既に前にも述べたやうに、「ヤスナ」は、多くの同じ句と同じ章とを繰返して始めて七十二章になつて居るのであるが、「ガーサー」十七章は、實に、其の全部の眞髓なのである。その十七章は、普通、音律の關係から、次の如く

Ahnavaiti	自	ヤスナ第二十八章
アフナヴァイティ頌、	至	ヤスナ第三十五章
Ushnavaiti	自	ヤスナ第四十三章
ウシタヴァイティ頌、	至	ヤスナ第四十七章
Spenta Mainyu	自	ヤスナ第四十七章
スペンタマイニユ頌、	至	ヤスナ第五十一章
Vohu Kshathra	自	ヤスナ第五十一章
ヴォフクシャトラ頌、	至	ヤスナ第五十三章
Vahista Usht	自	ヤスナ第五十三章
ヴァヒスタウスティ頌、	至	

の五集に區分されて居るのである。

第一集の「頌」は、「アフナヴァイリア」と稱する祈禱文と、同じ音律に従つて書かれて居る故を以て、斯く名づけられて居るのである。一行十六音節より成り、三行に分たれて居るのである。此集に包括されて居る「ヤスナ」第二十八章以下七章は、断片的であつて、七章全部に一貫したる意を述べんとして居るものではない。今、此等の七章の内容を調べて見ると、先づ第一に吾人の注

意を索く點は、かのベルシャの神話に、聖なるものとして尊敬せられて居る「牛の靈」が、神に衰願する言葉である。之等の言葉には、牧畜を業とし、正直に生計を營んで居つた住民が、彼等の困苦を訴へて居るやうである。されば、

「誰が爲めに我生れ、誰が型りし我が身、

怒の鞭は絶えず、強奪悲愁の日も近し、

爾の外牧人あらし、我に牧場の恵あれ」、

云々と、牛を創造りしと稱せらるゝ神、アシャヴァン（正義の神）に、此等の暴逆と偽の苦責を除き、良く牛を扱ひ得る人はなきやと、叫び求めて居るのである。次に、人は卑きものを知るに疎く、アウラマツダのみ良く裁判き得んとて、彼等はアウラマツダに縋らんと決心する。アウラマツダは、

「牧人に耕夫に創造者爾を模造せり」、

と、ゾロアスターをして、衆に臨ましむるやうになつて居る。ゾロアスター、

諸々の神を招願し、アウラマツダに來りて、

「おゝアウラマツダ、彌勝る恵を、

我等願す、正しきものゝ望、

正しきものゝ祈は、爾の怒を消さん、

爾聞き給へば、我は尋ねん、

我生きん命は如何に」、

云々と、ゾロアスター自身の新禱がある。或章には、ゾロアスター教を二元教だと思はせた原因ともなつた、教義の説明もある。又、善と惡との何れかを、自ら選擇する時の心の準備を説き、惡魔に組するものは、幸福に到る途を毀ち、正しき途を歩むものは、諸々の神の悦に入らんと、

「死に定められたる者等よ、

マツダの教を聞かば、爾等に幸ある喜悅、

偽はるもの、罰は、苦しき悲痛、

正しきもの、恵は永遠に爾等にあらん、

と教へて居る。ゾロアスターは更に、アウラマツグと靈交して、

「おゝアウラ我尋ねん、現世と未來の知、

正しきもの、望、惡しきもの、叫、

何れが重き、爾の正義の秤に」

「おゝアウラ我尋ねん、

如何に爾の如くなるべき、

又我何をか爲さん、

暗きは偽るとも、爾我等と俱なれ、

爾、「至善」の現示、

「彼に耳傾けよゝゝアウラー

正しき思に憐がる、彼、

誰か裁判得ん、二の舌の働、

輝く光、爾の外に、

誰か意の儘に裁判得ん、

と讚美して居る。又、ゾロアスター、教の眞髓である「善思」「善言」「善行」の三位一體論を説き、惡魔の齎らす惡果を警告して衆を戒め、働く牛を助くるものは恵に到る道を弘むと、「アフナヴァイティ頌」の七章を結んで居る。

第二集の「ウシタヴァイティ頌」は、「ヤスナ」第四十三章以下四章を包括して居るが、普通一行十一音節より成る五行を以て一句となつて居る。他の集の如く、古くより傳えられた斷片を綴り寄せたるものと見え、始終一貫した思想の連鎖ではないけれども、ゾロアスターとアウラマツグの問答で、ゾロアスター、教の基礎建設の時代を、叙して居るもの、やうに思はれる。先づ、正邪の二元

を指定し得る力の根源なるアウラマツダ、博愛寛仁なるアウラマツダ、聖の聖なるアウラマツダに對するゾロアスターの堅信を歌ふ頌を以て始まり、彼がアウラマツダに信實ならん爲め、又、己の信仰を向上せしめん爲め、彼の感謝と敬虔の念とを包括した反問體の讚辭、及び祈願が続いて居る。或る學者が、對惡魔の戰曲であるやうに説いて居る次の、

「あゝアウラ我に語れ、眞を、

惡魔とは誰ぞ、何が爲めに斯く邪なる、

加護に逆ふ偽か、

「あゝアウラ我に語れ、眞を

正義の手に導かれつゝ、悲恨を食むか

邪界の王、

云々の句もある。引き續いて、人間界に於ける善惡二元の、和解することなき

拮抗、軋轢、挑戦、對戰、善の勝利等を描き、此世は、畢にアウラマツダのものであつて「善意」の父である彼は、我等「善意」に忠實なる時、彼の子として幸福と永遠の命を以て報ゆると説き、アウラマツダを讚美し、禮拜して彼に奉仕するの誓を書いて居る。最後の章も斷片的であつて、先立つ章とあまりに關係なく、苦み迷ふ心奥より叫ぶ聲、邪界に對する憎惡の聲、信者を激勵してアウラマツダに哀訴する祈の言葉等が書かれてある。此等は、恐らくゾロアスター自身の心裡を描いたものであらうと思ふ。此章に於て、初めて、死後正邪が區別される「審判橋」（サンサート、サトラウシ）の事を記して居る。又、特に注意を惹くことは、此章の終結に近いて、ゾロアスターの徒子が顯はされて居ることであつて、後に續く三集の「ガーサー」は、主にヴィシタスバ、又はジャマスバ（Jamaspā）の如き、弟子の手に依つて書かれたものゝやうに思はれる。

第三集の「スペンタマイニュー頌」は、前集の如く、冒頭にある祈文の音律に

全部が従つて居る爲め、斯く名づけられて居るが、十一音節の四行が一句を形造つて居るのである。此集には、前述の二集にある讃頌、祈願が多く繰り返されてあるが、ゾロアスターの弟子が主要なる地位を占めて居る處から、ゾロアスター教を歴史上より觀察する後世の學者は、種々の異見を述べて居るやうである。

最後の第四、第五の二集は、各一章のみであるが、第四集の音律は、十四音節の二行が一句をなし、第五集は非常に不規律なる音律で書かれてある。前者に顯著なる事實は、バクトリアの王ヴィシタスバを始め、有力なる數人がゾロアスター教に歸依する事、女性に對して男と等しき尊敬を示して居る諸節である。後者に注目すべき點は、結婚に關する事項である。花嫁花婿が意を盡して相助け、敬虔の念で勵むことを誓ふと、

「忘れずして覺えよ。」

爾等各々の心は、「善思」の命に生き

互に正しからんことを努めよ、

さらば報あらん、

と教え、更に會衆に向ひて、

「偽の教に耳を傾くる者は、

滅の途に在り、

崇むべきを賤み、正しさを輕んずる者は、

己の身を滅ぼす」。

云々と戒めて居るのである。

以上に予は、「ガースー」五集の内容を略述したのであるが、同意の句が幾度となく繰返されてある爲め、感興を弱めて居る場合が多く、讀み續けて倦怠を覺え、動もすると嫌惡の念に驅られる程の傾向がある。勿論是れは、獨り「ガ

「サー」五集のみに止まらず、アヴェスタン文學に共通なる缺點であるが、往時永く口碑に傳へられた結果、多く反復せられて、斯の如く單調なものとなつたのであると思ふ。

次に、言語學の見地から古きに屬して居るのは「ヤスナ、ハブタンハイテイ」で、現存する「アヴェスタ」寫本の順序に依ると、「ヤスナ」の第三十五章以下七章に當つて居るのである。此「ヤスナ、ハブタンハイテイ」は、教義上から見ても、可なりまで變遷して居るので、「ガーサー」中に見受けられなかつた祭祀も、此七章に著しく現はれて居るやうである。就中、燃ゆる焔を以てアウラマツダを拜する祭祀は、その顯著なるもの、一つである。

古來、印度に於ても、火を崇める習慣があつて、アグネー（火の神）に對する敬虔の念は、彼等印度族の心に深く銘じて居つたやうである。されば、インド、イラニアン種族が分離せざりし以前より、火に對する崇敬の觀念は彼等の間に

存在して居つたので、分離後、特にイラン族のみ、焔その物を禮拜に用ふるやうになつたのである。蓋し、火は物を淨めると云ふ信念に基いた祭祀であると思ふ。

今、暫く「ヤスナ、ハブタンハイテイ」の内容を研究して見る。先づ祈の言葉として、

「焔の祭祀もて吾等爾に近かん、おゝアウラマツダ、

「爾の力に樂しむ我等に來り給へ、審判の日に、アウラマツダの子なる焔よ、

と云つて居るが、次に著しい事實は、水に對する敬虔の念、家畜の靈に對する尊敬の念等で、「ガーサー」以後の發展が明白に認められる。更に進んで、

「吾等は水源を崇め、水流を拜し、道路の分岐を敬し、湖水を崇め、耕野を拜し、天地を敬す、

云々とある點に至つて、漸次に發展した教義の跡を認め得るのである。

又、此等七章の内容を「ガリサー」のそれと比較して見ると、ガリサー時代には高貴の間のみ傳播されたゾロアスター教義が、漸次に廣く傳へられ、「ヤスナ、ハプタンハイティ」に於ては、貴賤貧富の別なく、共に正しからんとを祈つて居り、確に信徒の増加したことを知らしめて居るやうである。

又、修辭の方から見ると、「ガリサー」の文に見られぬ「我等禮拜せん」と云ふ一語が、幾度か繰返されて居る特殊な點が認められ、更に各章の終に、

「人とし生れし如何なる男も、如何なる女も、正しき心を持って祭りし供御には、より良き何物かを、アウラマヅダ認め給へば、我等禮拜せん」。

と云ふ、祈の語が繰返されて居るのである。

以上に述べた「ガリサー」、又は、「ヤスナ、ハプタンハイティ」に屬する或章の一部或は全部が、比較的新しきアヴェスタン語を以て書かれたる、他の諸章の

處處に繰返されて、現存する「ヤスナ」の部が成立して居るのであるが、前述の「ガリサー」又は「ヤスナ、ハプタンハイティ」の如く、各章の内容は斷片的であつて、終始一貫して居らない。而して、此「ヤスナ」は、彼のパーラヴィー語の遺著「ディーンカート」に説かるゝやうに、最初の「アヴェスタ」二十一篇の全部より、儀式用の祈禱文等を一纏にしたのであつて、後世の經典蒐集者の手に成つたものゝやうに思ふ。

更に、内容に告白、招願、祈禱、訓戒、讚頌、感謝等の言葉を包括して居る此「ヤスナ」は、已に述べたやうに復誦する處多く、單調にして、讀んで倦怠を覺えしむるやうな點が少くないけれども、原始的な此種の作には、避け難いことであらう。尙詳しく調べて見ると、斷片的な諸章の集められた内にも、幾分か秩序があるやうに見受けられる處もある。之れも亦、後世の經典蒐集者が、斯る順序に排列したものゝやうに思はれるのである。兎に角、最初に「善思」

「善言」「善行」三位を具備する完全なる心を以て、アウラマツダを始め、諸々の神と有らゆる善の源を招願し、次に供物を捧ぐべき草造の座と灌祭を彼等に供へて禮拜すべきことを述べ、又、ハオマ(一種の酒)と讃頌と饌祭とを整へて神々を禮拜する順序を教示して居るのであるが、此處彼處に古い讃辭が挿入されてある。第九章には、ハオマに關する古い記事が述べられてある。續いて、人格化せるハオマとゾロアスターとの對話があり、その内に彼の教理が説かれ、又、彼の家系に就て記されてある。次に、ハオマを諸々の神に捧ぐる儀式が描かれてあるのである。第十二章には、ゾロアスター教徒の告白、招願、禮拜等に就き述べられてあるが、新しきアヴェスタン語の中でも、古きに屬する言葉で書かれてあるので、或る一部の學者は、「ヤスナ、ハブタンハイテイ」が新しきアヴェスタン語に變つた道程を示して居るとさへ説いて居るのである。次に續く數章には、ガーサー時代の古い語で書かれてある處が多いが、主に「ガー

サー」の復誦、又はその反映であつて、中には教義の註釋を問答體に記した處もある。第二十章より、彼等が多くの場合に用ふる四つの祈禱文とその説明を誌し、續いて儀式に使用せらるゝ器具に就き述べ、供物を取扱ふ時に唱ふる文を載せて居る。第二十三章には、家屋の「精」より聖徒のそれに及ぶ多くの靈を招願して、此等に供御し、或は、正しき途を歩みしもの、靈を祭りて、「ガーサー」の諸章に入る前提である第二十七章に及んで居る。

「ガーサー」と「ヤスナ、ハブタンハイテイ」との間にある第四十二章は、後者に附加された祈禱文であり、第五十二章は、祝禱文である。「ガーサー」に續いて、アリヤン人に對する恩恵を祈る章が、ガーサー語を以て書かれてある。第五十六章に到りて、殊に注目されるのは、「從順」を神格化したスラオシャの招願、頌、及びその禮拜である。ゾロアスター教徒は、從順なる事に依つて多くの善が實現されると信じ、その力の大なるに敬虔の念を持つて居つたやうに

思はれる。續いて、教を奉ずる家族に恵あれと祈り、或は、惡に挑戦して傳道に志す意を述べ、或は、總ての物を照し、總ての物を淨める火に對し、又は、男女を潔め、總て生命を有する者を清める水に對し、供御禮拜する言葉、或は、女性を代表するアフリアンに對する稱讚等を以て、章を重ね、最後に、宗教上の律を頌し、是迄に擧げた諸々の善の源なるアウラマツダを始めとして、草木の「精」にまでも供御禮拜することを誌し、「ヤスナ」の七十二章を形造つて居るのである。而して、此等は、或る一時代を反映した遺作であつて、假令文學として左程に價值がなくても、宗教及び神話の研究に多くの資料を與えるものである。今、左に二三節を譯して見る。

「我はアウラマツダを招願し、供御を完ふせん。造物者なる、光輝ある、榮光ある、最も大にして、最も善なる、最も美にして、最も強く、最も賢くして、最も完全なる、正しき律もて終を最も全からしめ給ふ、真に我等

の心を任せ得る、善を加え
恵を下し給ふ、我等を型造
り、我等を育て、我等を保
護し、最も寛大なる魂に満
ち給ふアウラマツダ」。

(ヤスナ第一章の一)

ゾロアスター、

「あゝハオマ、爾誰を此世に
齋し、如何なる恵を彼に與
へ、又何を彼は得たるか」。

ハオマ、

「我が此世に齋せる最初の

アウエスタン文學の沿革

Handwritten text in the right margin, likely a transcription or commentary on the adjacent page's text.

人はヴィヴァンヴァントにして、此恵を與へ、又彼それを得たり。彼に利發なるエイマと名くる男子生れ、家畜と人の死を自由にし、植物と水の乾燥を自由にし、又人に不腐の食を與ふる自由を得たり」。

(ヤスナ第九章の三、四)

「我等スラオシャを禮拜す。恵ある、威嚴ある、勝利の一打もて敗り、部落を賑はす彼、聖なる司式者にして、男女の内にて貧しきものゝ爲めに壯大なる家を建て、日、没した後、鋭き戰斧を以てアエセマ(惡魔)を血まみれに敗り、頭を撃ちて地に倒す彼」。

(ヤスナ第五十七章九、十)

「おゝ爾アフリアン、アウラマヅダの娘、我に、天國の勇しき嫡子にして、我家、我里、我族、我州並にその首領を賑はす者を與へよ」。

(ヤスナ第六十八章、五)

次に、「ヴィスバラッド」は、是迄に述べて來た「ヤスナ」と、殆ど同性質の祈禱、讚辭の蒐集されたもので、^四二十章より成立つて居る。けれども、各章共に短く、その大部分は「ヤスナ」の何れかの章に屬するものゝ如く、ゾロアスター教の初期には、「ヤスナ」と共に、一篇に網羅されて居つたものらしく思はれるのである。獨逸のハウグの説では、此「ヴィスバラッド」は、最初の二十一篇の何れにも斯る特別な部がないやうに述べて居る。されば、後世の經典蒐集者が、禮拜等の儀式に用ひらるゝ祈禱文を纏めた「ヤスナ」に洩れた部分を編輯したものゝやうに思はれる。又、佛國のダルメストッターの如きも、確定した意見を述べず、今尙不明瞭な點とされて居るやうである。然し、此等の「總ての主」、^五諸の「精」に捧ぐる祈禱文集「ヴィスバラッド」の句調はに、「ヤスナ、ハプタンハイタイ」に類似して居る點が多い。たゞ、その内に用ひられてある言語のみは、新しきアヴェスタン語に屬して居るのである。又、その内容を

讀んで見ても、ゾロアスター教が、或程度まで發展した後の作である事を、容易に認められるのである。

獨逸のゲルドネルが、舊約全書中の「利未記」の如き性質のものであると評した「ヴェンディダード」は、既に述べたやうに、最初のゾロアスター教經典二十一篇の内にて最も完全に傳へられた部で、二十二章より成り、多くの神話を含む法律書である。今、その内容を調べて見ると、第一章には、アウラマツダの世界創造と、之れに對抗する惡魔の限界創造を物語つて居る。第二章には、文化の建設者で、最初の人間として崇められるエイマの出現に就き説き、第三章には、地の神が如何にして幸不幸を覺知するかを述べ、又、死せる人の處分に就き教へて居る。第四章には、諸種の契約とその破棄者に對する刑罰を定め、第五章より數章に亘りて、第三章の終に説き始めた死體の取扱方を教へ、且つ、其跡の淨め方、葬式、此等にたづさはつた人々の慎しむべき事共を説いて居る。

第十三、四の二章には、特種の犬に對する敬虔の念、又、その他の犬に就き述べて、第十五章は、斷片的な訓戒、第十六章に婦人月經時の心得、又は淨め方に就き、第十七章には、髪と爪との處分に就いて書いて居るのである。第十八章に、不徳なる牧僧に對する律とその他三四律を説き、第十九章に、惡魔の種々なる反抗と之れに對する防禦、清淨の法を教へて居る。第二十章には、諸々の醫法を誌し、第二十一章は、雨に對する招願、頌詞を記し、最後の第二十二章に、惡魔、九萬九千九百九十九種の病を以てアウラマツダに挑戦し、其等の病魔に對する呪文を以て終結を告げて居るのである。

此「ヴェンディダード」も亦、アヴェスタン文學の他の部分の如く、至つて單調な書き方であるが、特に「ヴェンディダード」には文體の不變なる章多く、讀經に容易く、又暗誦するに便なるやうに書かれてある。是れが即ち、最初の二十一篇中、最も完全に傳へられて來た部となつた所以ではあるまいか。更に、他

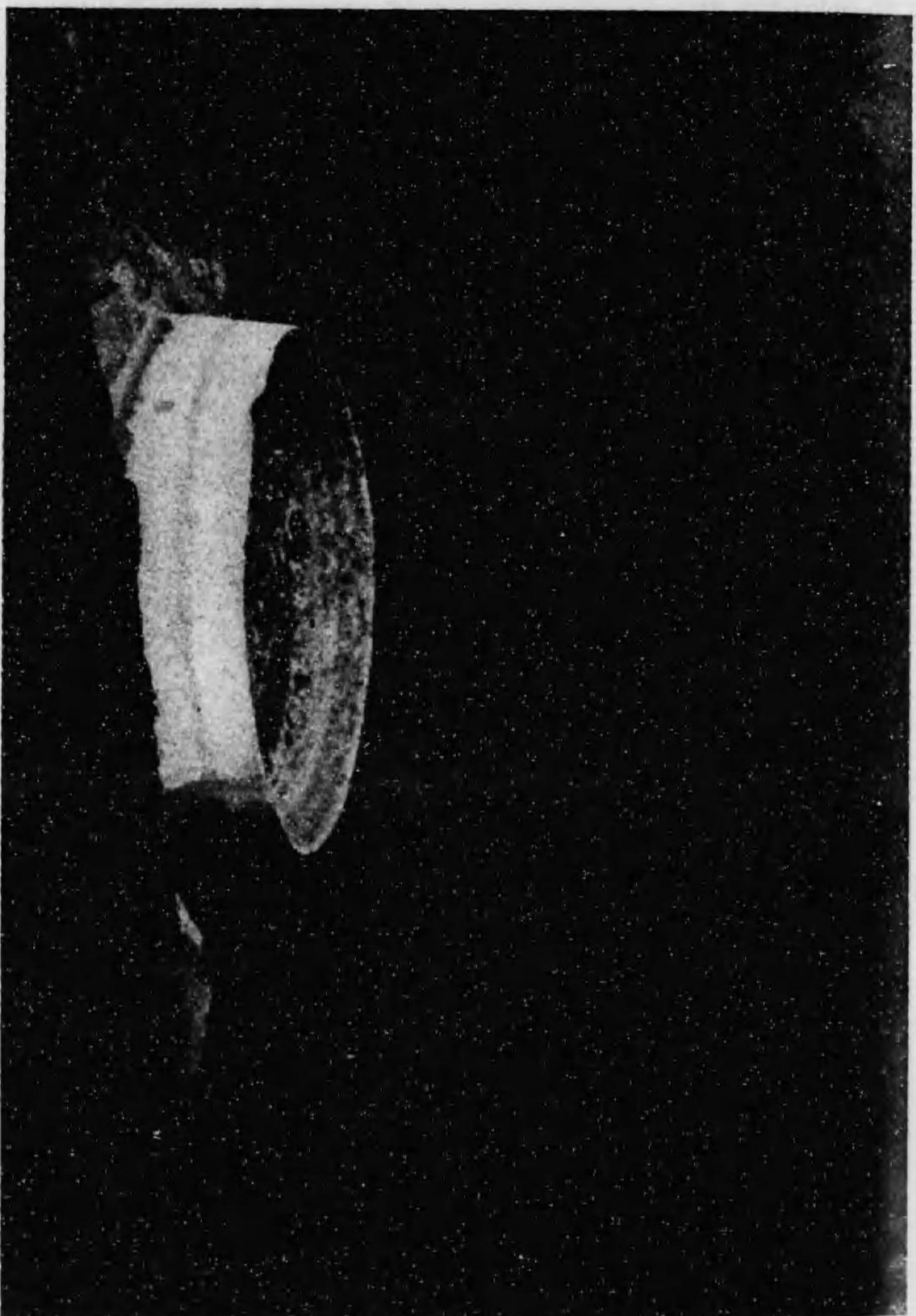
方面からその内容を窺ふと、ペルシャに於ける古來の風俗習慣を種々の方面より示して居つて、前述の「ヤスナ」に比して遙かに興味が深い。今その一部を譯して見ると、世界創造と惡魔の對抗を叙述した第一章に、

(前略)「我、アウラマツダ、第三に創造せし良き土地は、強くして聖なるモール (Mouru) なりき。然るに、死の惡魔 (アンローマイニ「Anrō Mainyu」) 來り、妖術を用ひて肉慾の罪を生みぬ。(中略) 我、アウラマツダ、第八に創造せし良き土地は、ウルヴァ (Urva) の潤澤なる牧場なりき。然るに、死の惡魔來り、妖術を用ひて高慢の罪を生めり。(下略)

(五、十節)

等、書かれてある。又、第五章以下、數章に、死體の處分に就きて述べ、知らずして、死體に汚がされたる薪を用ひ、火を穢した時の所罰を質して曰く、

「谷の深みに人死し、山頂より鳥その谷に來りてその死體を啄む。飛び戻り



THE ZOROASTRIAN TOWER OF SILENCE AT REI

By the Courtesy of the Macmillan Co.

(From Jackson's Persia Past and Present.)

て或は堅き、或は柔き木に棲りて脱糞す。他の人、谷より山頂に來り、鳥の棲れるその木を切り倒し、薪を作りて火に投ず。彼の所罰は如何に」。

アウラマヅダ答へて曰く、

「犬、鳥、狼、風、蠅の齎らせし死體の汚より人に如何なる罰もなし」と。更に又、死體を運ぶべき場所を叙し、

「死體を喰ふ犬又は鳥の、常に棲むと云ふ山の頂に、(中略)犬、狐、狼の達し得ぬ、排水良き建物を築きて、(中略)日に曝すべし」。

と教へて居る。之れ、今日ゾロアスタール教徒の葬地である、ダフマー(静寂塔)の出來た所以である。又、彼等が一種の犬を崇めるやうになつた理由とも覺しき事項を、第十三章に叙して居る。曰く

「犬は八種の性格を有す。彼は牧僧、勇士、耕夫、虚無僧、盗人、野獸、媚婦、及び小兒の如き性格を有す。彼は、殘物を食ふこと牧僧の如く、恩を

感ずること牧僧の如く、容易く満足すること牧僧の如く、彼は此等のことに牧僧の如し。彼は真先に歩むこと勇士の如く、彼は恵ある牛の爲めに闘ふこと勇士の如く、彼、第一に家より出ずること勇士の如く、彼は此等のことに勇士の如し。彼は、常に守りて軽く眠ること耕夫の如く、彼は家より第一に出ずること耕夫の如く、彼は最後に家に歸ること耕夫の如く、此等のことに彼、耕夫の如し。彼は、虚無僧の如く吠え、彼は虚無僧の如く憚らず近寄り、彼は虚無僧の如く瘦せ、彼は虚無僧の如く貧し、此等のことは彼は虚無僧の如し。彼は盗人の如く暗きに潜行し、盗人の如く恥ぢず食し、盗人の如く信じ難き看守なり、此等のことに彼は盗人の如し。(野獸の性格は盗人と同様に述べてあるから譯を省略する)。彼は、媚婦の如く歌ひ、媚婦の如く路傍に立ち、媚婦の如く憚らず近寄り、媚婦の如く瘦せ、媚婦の如く貧し、此等のことに彼は媚婦の如し。彼は小兒の如く眠を好み、

小兒の如く恐れ、小兒の如く多く語り、小兒の如く這ひ、此等のことに彼は小兒の如し。(四十四節より四十八節まで)

と、その單純にして、然かも犬の性格を良く描いて居る表現、斯る性格を有する犬を崇めるやうになつた素朴な思慮、又、彼等の觀察等、皆往時のベルン人を追想せしむる好料であると思ふ。又、十五章には五種の大罪人を擧げ、

「正しき信仰の人に他の教理を教へたる人、餘りに堅き骨又は熱き食を犬に與へたる人、孕める犬を害ひ或は後を追ふ人、白帶下の婦人又は月經中の女に近づく人、妊娠せる婦人に近づく人」。

と述べ、犯罪人の處罰を嚴重にして居る。彼は又、總て人體より離れたものは、死體に添ふ惡靈と同様の惡魔が伴ふことを信じ、刈し髪又は爪などの處分に就き嚴重にして居る。尙、「ヤスナ」に比して興味あり、又、幾分か技巧に富み、活氣に満ちた句調の好例は、第二十一章にある雨乞の祈文である。

「來れ來れ、あゝ雲、空に添ひ大氣を通して、この大地まで。(中略) 許多の滴、無數の滴、病を醫し、死を止め、ジャイニの齋らす病を醫し、ジャイニの齋らす死を止め、ガダー、アバガダー(病名)を止めよ。死もし夕來らば、曙には癒の雨。死もし曙來らば、夜に癒の雨。死もし夜來らば、曉には癒の雨。降れや、新しき水、新しき大地、新しき草木、新しき健かさ、新しき癒の力」。

(二、三節)

云々。その原始的な表情に少なからぬ妙味があると思ふ。此篇は又神話に富んで居つて、未だ不可解なる點も多いのであるが、往時の刑法、民法を研究するには、唯一の資料であるのである。

「ヤシツ」は、前にも述べたやうに、祈禱文と讚辭とを網羅して居る部であるが、彼のダルメストッターも説いて居るやうに、最初の「アヴェスタ」二十一篇の此處彼處より同種のものを集めたものゝやうである。而して、その内に多く

變轉した跡を遺して居る神話的作品である。一種の音律(一部の學者はサンクリット語の作、ヴェーダの音律に類似して居るとも説いて居る)に従つて讀誦せらるゝ故を以て、歌の部類に屬して居るやうに述べるものもある。けれども、單純な神話的祈禱文であつて、讀んで特に詩趣を味ふ程の點も、別に認められない。然し全體より見て、「ヤスナ」、「ヴェンディダード」よりも活躍せる敘述文も多く、又、華かなる言葉を以て裝飾されたる點もあつて、内には文藝的加味のある處も認められるのである。「ヤシツ」は、元、三十集あつて、日々異つた神格的「精」を稱讚し、禮拜したのであつたが、現今は、漸くその三分の二を残して居るのみで、或る集の如きは、日に幾度となく唱へられ、又同じ「ヤシツ」を、異つた日にも唱へるやうになつたのである。

此等の「ヤシツ」の内には、「ヤスナ」より引用されてある許多の頌、祈禱文があり、又、何れの「ヤシツ」にもその冒頭と結末には、同様の頌と信仰箇條

の如き禮拜の讚辭が繰返されてある。此等は、「ヤスナ」及び斷片的な祈禱文集「ニャーイフシ」の中にあるものを復誦したので、言葉の古さに屬するものと、新しいものとが混用されて居るのである。

此等の「ヤシツ」を大別すれば、ゾロアスター教の教義を説明するものと、ペルシャの神話を物語るものと、ペルシャの稗史を誌して居るものとの、三種に分類することが出来る。全體から見ても、ガトサー時代よりも新しい作のやうである。アヴェスタン文學の他の部に比して、文雅に富み、文學的見地から最も趣味の多い部であると云つても過言でないと思ふ。只だ、アヴェスタン文學全部に共通なる缺點(幾多の不可解なる文字、單調なる文體等)が、此部にも多いので、雅致を削いで居ることが多いのは遺憾である。

今、此等の内容を調べて見ると、第一の「オルマツド、ヤシト」(Ormazd Yast)は斷片で、終が完全して居らないが、二部に分れ、一部はアウラマツダ

の屬性に基き名づけられたる許多の名稱と、此等を唱へて得る利益を述べ、他の部には善惡の争闘と、アウラマツダの讚辭が、誌してあるのである。次に、七つの「天使」並にその他の從神への頌である「ハフト、アマシヤスベンド、ヤシト」(Haft Ameshaspand Yast)。「最正」(Asha Vahista)の頌で、惡魔の呪文である「アーダハベニト、ヤシト」(Ardabahisht Yast)。「衛生」(Haurvatat)に捧ぐる頌で惡魔を拂ふ呪文「ホーダード、ヤシト」(Khordad Yast)。雨を司る星と信ぜられて居つた天狼星に捧ぐる「タイロー、ヤシト」(Tir Yast)。女神アードドゥヴィ、スロー、アナーヒタ(Ardvi Sura Anahita)に捧ぐる讚「アーバン、ヤシト」(Aban Yast)。宇宙の總てのものに内住すると信じた精に捧ぐる頌「フラヴァーロー、ディーン、ヤシト」(Fravardin Yast)。地の守護神であり、眞理に基き立證する神として崇められて居つたミスラ(Mithra)の頌「ミヘル、ヤシト」(Mihir Yast)。「勝利」(Verethraghna)の精が、風、鳩、駝駱等の十種

の異なる形にてゾロアスターに出現せる種々なる力を讚美する「バヒラーム、ヤシト」(Bahirām Yashit)。富の女神として崇められたアシ(Ashih)に捧げたる「アード、ヤシト」(Ard Yashit)等、十九章の「ヤシツ」と、外に、断片的な二三章の「ヤシツ」より成立つて居るのである。今、左に數節を抜萃して譯して見る。

「我等ミストラに供御せん、廣き牧場の守に。眞を語り、多くの耳と多くの眼を以て集を司る彼に。(中略)、最初にアルブーヅ山に達し、不死にして歩早き馬に引かるゝ太陽に面し、金雲翳く内に、美しき山の頂に立ちて、アリヤン人の住家を惠の眼もて見守り給ふ」。

(「ミヒル、ヤシト」七、十三節)

「彼等の光と榮に日もその軌道に進み、彼等の光と榮に月もその軌道に進み、彼等の光と榮に星もその軌道に進む。激しき戦に、彼等援助に最も賢

し、信ずるものゝ精。信ずるものゝ精の内に最も強きはアウラマヅダの法に歩むものと、此世を改造する、來るべきサオシャンツ(Saoshyants)の精。今生くる信者の精は死せるものゝ精よりも強し」。

(「フラヴァーデーオン、ヤシト」十六、七節)

「エイマ、クシャエタ、良き牧者、フカイリヤの頂より、彼女(アシ、ヴァン、ヒ)に供御せん。彼、彼女に福利を乞ふて曰く、大なるかなアシ、ヴァン、ヒ、我に此惠を賜はらずや。我をしてアウラマヅダの創造りし此世に家畜と禽類の群を齎らしめよ。我をしてアウラマヅダの創造りし此世を不滅ならしめよ。我をしてアウラマヅダの創造りし此世より飢と渴を去らしめよ。我をしてアウラマヅダの創造りし此世より老と死とを去らしめよ。我をしてアウラマヅダの創造りし此世より暑き風と寒き風を去らしめよ、多くの年月の間」。

(「アード、ヤシト」二十八、九、三十)

以上に於て、予は、アヴェスタン文學中の主要なる四部に就いて述べたのであるが、尙、此等の外に、最初の「アヴェスタ」二十一篇の何れかに屬して居つた断片的な祈禱文、頌等が遺つて居る。けれども、既に述べた部分と大同小異なものである。其等の断片中、主なるものゝ一は、異なる日に一つづゝ誦する三十の頌「シローザー」(Sirôzah)であるが、既に述べたやうに、「ヤシツ」及びその他の小品と共に、一部の學者は「ホルダ、アヴェスタ」の内に包括して居る。此「シローザー」は、二部より成立つて居つて、一部は他の部より、頌を捧ぐる本尊を叙述するに詳であるが、その書方に僅かの差異がある計である。他の断片には、太陽、ミスラ、月、水、火等に捧ぐる讚「ニャイッシ」、供物の前にて唱ふる祝禱「アフリンガン」、一日を五分して、その特別なる時刻に捧ぐる祈「ガー」等がある。

以上に予は、アヴェスタン文學の全部に就き、その概略を述べたのであるが、

此文學が吾人に教ふる第一の事は、ゾロアスター教そのものである。而して、その教典「アヴェスタ」の内に、往時より現今まで此教を遵奉して來た信者の情意を描き、彼等の従つた諸々の規定を誌して居るのである。更に、言語學の見地より、此アヴェスタン語がサンスクリット語と姉妹の關係を有する事を教へ、又、ペルシャの神話を語り、インド、イラニアン比較神話の研究に、唯一の資料となつて居るのである。



SHAPUR, THE GREAT.

パ
ー
ラ
ヴ
ィ
ー
文
學
の
内
容

既に述べたやうに、アカメニアン時代の碑文解讀に一條の光明を與へた言語は、ベルシヤ中世期に通用されたパラヴィー語であり、又、アヴェスタン文學の研究に最も樞要なるは、そのパラヴィー語にて書かれてある多くの遺著である。予は、此章に於て、其等の作の概略を述べやうと思ふのである。

獨逸のハウグの説に依ると、パラヴィー語は、西紀前第三四世紀頃、已に貨幣等に鑄られて居ると云つて居るが、その當時はアラメック語の文字を用ひたやうである。降つて、西紀等一世紀頃に鑄造された貨幣には、希臘文字を使用したことも發見されて居る。現今遺つて居るパラヴィー文學は、セミティック語の文字より模型されたものを以て書かれてあるのであるが、殆ど四百有餘のセミティック語と、百餘の略語も同時に使用せられるやうになつたのである。

而して、サンスクリット語と殆ど同数の異なる音を有せるペルシャ語が、中世期の碑文に用ひられたるパルサーヴィー語に於ては、十八文字、その他の遺著に使用せらるゝものには僅かに十四文字を以て書き表はされて居る爲め、一字が多く異なる音を有し、不明瞭な言語となつて居るのである。英國のウェストの説では、當時のペルシャ人は會話には常に純粹なるペルシャ語を用ひたやうであるけれども、書く時にのみ、特に斯る不完全なる文字を使用しなければならなかつたやうに云つて居る。斯學の泰斗であつた彼さへも、二十有餘年の彼の研究が、未だ彼をして其等の遺作を容易に解讀し得る域に導いて居らぬと、告白したこともあつた程、不可解な言語となつたのである。

抑も、パルサーヴィーと云ふ語源は、アカメニアン時代の楔形文字碑文に、パルサーヴァ (Parthava) と誌してある國があつた。その名から變化して來た言葉であるが、この國は、西紀前三世紀から、暫時ペルシャの一部に勢力のあつた國

で、その頃既に此パルサーヴィー語が形造られつゝあつた爲め、希臘人、羅馬人から、斯く名づけられるやうになつたのである。而して、此パルサーヴィー語の遺した作品の主なるものは、アヴェスタン文學の評註か、又は、之と直接關係あるものである。

既に前章にも述べたやうに、最初の「アヴェスタ」が失はれたので、今日までの研究の結果では、アヴェスタン文學時代の文字に就ては、未だ一定した説がないのである。パルサーヴィー文字を官語として使用して居つたサセーニアン朝の保護の下に蒐集されて、現今に傳はつて居るアヴェスタン文學は、パルサーヴィー語、及び其の遺作と相反映して、密接なる關係を有するやうになつたのに、不思議はないのである。斯くてパルサーヴィー語は、亞刺比亞文字の採用を強ひられた頃まで、廣くペルシャに於て使用せられたのであつた。

扱、此パルサーヴィー語を以て書かれた最古のものには、西紀第三、四世紀頃、

サセーニア朝の諸王が銘刻した碑文がある。此等の碑文は、西紀千六百六十年代より、ペルシヤを旅行した多く歐洲人に依つて寫され、學者が注目するやうになつたのである。既に述べたやうに、西紀千七百九十三年に至りて、漸く、佛國のド、サシーが、サセーニアン朝の始祖アールダシーと、及びその世嗣シャーブールが、ナクシ、ルスタム (Naksh-i Rustam) とナクシ、ラドシャブ (Naksh-i Radshab) とに銘刻した、希臘、サセーニアン、パーラヴィ (Sasanian-Pahlavi) 及びカルデオ、パーラヴィ (Chadaean-Pahlavi) の三種の文字で書かれた碑文を解讀したのを以て嚆矢とする。それ以來、漸次に貨幣、或はその他の碑文をも解讀し得るやうになつたのである。而して、此等の碑文の中の一部は、その書式に於てアカメニアン朝の碑文のそれに類似して居る點が多い爲め、アカメニアン朝の楔形文字の碑文を解讀するに際し、かの獨逸のグロテフェントに樞要なる暗示を與へたのであるが、又同時に、彼等民族が、此種の文に用ひた或



TOMBS OF THE ACHÆMENIAN KINGS AT NAKSH-I RUSTAM
(Tomb of Darius to the right)

By the Courtesy of the Macmillan Co.

(From Jackson's Persia Past and Present.)



FOURTH SASANIAN SCULPTURE AT NAKSH-I RUSTAM

By the Courtesy of the Macmillan Co.

(From Jackson's Persia Past and Present)

(上圖ノ圖内ヲ擴大セルモノ)

る一定の形式をも示して居る。これは、蓋し西亞細亞諸國に用ひられた書式の影響を受けたのであらう。

前記のバールヴィー碑文に用ひられたる二様のバールヴィー文字の内、カルデオ、バールヴィーの方は、西紀第三世紀の末頃廢用せられたが、サセーニアン、バールヴィーのみ漸くその生命を保ち、之れに基いて、西紀第四世紀より第六世紀に亘り、最も新しいバールヴィー文字が現はれたやうである。されば、中世期のペルシャ語は少くとも三四様の異つた文字を以て書き表はされたことが明かである。現今傳へられて居るバールヴィー語の遺作に用ひられたる文字は、最後のサセーニアン、バールヴィーを基として造られたものであつて、その當時含蓄せられたセミティック語が、その儘に使用せられて來たことは既に述べた通りである。斯の如く、バールヴィー語の文字が變遷して來た有様は、當時通用せられた貨幣、封印等の銘に依り知ることが出来るのである。

次に、古き筆蹟は、西紀第十九世紀の末、埃及のフューム (Fayūm) 地方に見出された多くの書類中に發見された、パラヴィー語の原本であるが、此等は西紀第八世紀頃の遺物で、内には會計日記のやうなものもあるけれども、斷片的で左程大切なものでもないやうである。その外、西紀第九世紀、南印度に於ける、シリアン教會認可の證人の姓名を刻んで居る銅版、及び第十一世紀の始めに書かれた碑文が、印度のボンベイ附近に發見せられて居るけれども、注目に價する程のものでもない。

翻つて、更に詳しく調べて見ると、西紀第六世紀の末頃までは、數多のパラヴィー語の作が出來たやうであるけれども、第七、八世紀頃より、ベルシャもムハムマド教徒の勢力に壓せられ、ベルシャ語もその内容外形に大なる變化を生じ、一般の間には漸く第九世紀の末頃まで、パラヴィー語の生命が保たれてあつたやうである。その後は、只だゾロアスター教の牧僧の間のみ専用せら

れるやうになり、彼の有名なる一作「ブリンダヒシム」(Būdahishm) の如きも、第十一世紀の末に出來たものとして知られて居るのである。ベルシャが、幾多の内憂外患と戦つて永い年月を経て來る間に、許多の古き作品の原本は紛失せられ、漸くその一部のみ、現今傳へられて居るやうであるが、其等の寫本も多くは、西紀第十二世紀以後のものである。又、主に、ムハムマド教徒に壓せられて印度に移住したゾロアスター教徒が、後世ベルシャに蒐集したものが多いうである。されば、パラヴィー語は、印度に居を移したゾロアスター教徒の間には、西紀第十六、七世紀頃に至るまで用ひられたやうである。

扱、パラヴィー文學には次の三種のものが包含されて居る。第一には、ゾロアスター教の教典「アヴェスタ」をパラヴィー語にて書き表はし、當時不明と考へられた處に、パラヴィー語の註釋が加へられたる作、第二には、直接「アヴェスタ」に關係はないけれども、ゾロアスター教の諸問題につき述べられた

るもの、及び、第三に、宗教に關係なき諸作品を分類することが出来る。その内、第一種には「バローラヴィー、ヴェンディダード」、「バローラヴィー、ヤスナ」、「ニールンギスターン」(Nirangistan)等の完全不完全なる二十七篇、第二種には、「ディーンカールト」、「ブロンダヒシン」、「アールターヴィーラーフ、ナーマク」(Arta-Viraf namak)等の八十二篇、第三種には、諸王の碑文及び貨幣を始め、その他の小品類が網羅されて居るのである。

更に、第一種に包括されて居る作品より、順次にその内容を調べて見る。第一の「バローラヴィー、ヴェンディダード」は、「アヴェスタ」の「ヴェンディダード」の部が、バローラヴィー語にて書き表はされた上に、當時一般の信者に對して不明瞭だと思はれた語句に、バローラヴィー語の評註が、書き加へられてあるのである。現在多くある寫本の中で、最も古く、最も信頼されて居るものは、西紀第十三世紀の曙光に寫された。此「バローラヴィー、ヴェンディダード」の内容は、既

に前章に述べたアヴェスタン語の「ヴェンディダード」より知ることが出来る。評註には、屢々不明なる點を解釋するものもあるけれども、此等の註釋を加へた人も亦、アヴェスタン語に通曉して居らなかつた形跡があつて、かの英國のウエストの如きも、此等の評註には餘りに信を措けぬやうに説いて居る。

次に、「バローラヴィー、ヤスナ」は、西紀第十一世紀の初に寫されたものが、最も古いやうである。他の諸作の如く、多くの異なる寫本があつて一致しない點もあるやうである。その内容は、アヴェスタン語の「ヤスナ」より察することが出来る。又、バローラヴィー語の評註が「ヴェンディダード」の如くに書き加へられてあるけれども、疑問なる點も尠くない。

「ニールンギスターン」には、最初の「アヴェスタ」中にあつた祈禱文、並に禮拜儀式に關する諸項が集められてあるが、獨逸のハウグは、其等の多くは現存する「アヴェスタ」中には認められないと説き、又、ウエストは最初の「アヴェ

スタ」二十一篇中の「フリスバラム」(Hūspāram)篇の一部をも此内に記されてあると説いて居る。多くある寫本の中で、西紀第十八世紀の初、ペルシャより印度に齎らしたものが最も正確なやうで、西紀千四百七十一年に、原本より寫されたやうに記されてある。

次には、「アヴェスタ」並にパーラヴィーの諸作研究に尠らず貢献して居る辭彙「フールハインギー、オイームエーヴック」(Farhang-i Oim-aevak)がある。此中には、殆ど千のアヴェスタン語と、二千以上のパーラヴィー語が網羅されて居て、寧ろ後世の作のやうであるけれども、信頼出来る遺著である。

此等の外に、第一種に屬するものは、現に吾人にゾロアスター教研究の資料となつて居る、アヴェスタン文學の此處彼處と相反する「パーラヴィー、ヤシツ」、「パーラヴィー、ヴィスバラッド」の如き諸作があるのである。

第二種に包括されて居るものの中には、ゾロアスター教研究に資する最も

大切なるパーラヴィー語の作が分類されてあるのであるが、先づ第一に數ふべきは「デイーンカールト」である。此作は、パーラヴィー文學中の最大篇であつて、ゾロアスター教の教理、彼等教徒の風俗、傳説、歴史、文學等に就き叙述して居るのである。現今多く傳へられて居る寫本中、西紀第十一世紀の初期に寫されたものが、最も正確なやうである。原本は、恐らく第九世紀頃に書かれたのであらうと説かれて居る。此原本には、最初、十數書あつたやうであるけれども、寫本では、初めの二書が缺けて、第三書より以下七書のみ現存して居るのである。而して、その最後の第九書の内容より見ると、尙其書に續いた數書のあつたことが察せられるのである。

更に、此等七書の内容を調べて見ると、第三書には先づ、宗教上の諸問題につきゾロアスター教徒の間に起つた議論を述べ、儀式上に必要な諸項、人間界に於ける善惡二元の諸行爲等に就き、説いて居るのである。第四書には、ゾ

ロアスターの教の「アヴァンタスベング七天使」の性格に就いて叙し、その外、時間と空間の關係、及び哲學上の諸問題に觸れ、更にサセーニアン朝の始祖アードダシールにつき誌して居る。第五書には、先づ、ゾロアスターの傳を述べ、次いでゾロアスターの教に歸依したバクトリアの王ヴィシタスバの事蹟、及びその他の内憂外患に就いて説き、ゾロアスターの訓戒等が書かれてある。第六書には、宗教、道德上の箴言を始めとし、風俗、習慣、傳説等を物語り、第七書に、ゾロアスター誕生前の奇蹟、彼の誕生より、最初にアウラマヅダと靈交せし時までの奇蹟、此第一の靈交よりヴィシタスバが歸依するまでの奇蹟、その時よりゾロアスターの死に到るまでの奇蹟等、十期に起つた奇蹟を誌して居るのである。第八書には、既に幾度か引用した、最初の「アヴェスタ」二十一篇の名稱、分類及びその概略を述べて居るが、此書に就いては、更に詳しく後に説明してあるから茲で省略し、進んで最後の第九書を調べて見る。此内には前述の「アヴェスタ」二十

一篇中、三篇のみの各章の内容を詳記して居るのである。察するに、殘る他の十數篇の内容を詳述した他の書が、此「デイーンカート」に包括されてあつたけれども、傳の經過と共に紛失せられて、傳へられなかつたのであらう。

次に、有名なるパトラヴィー語の作は「ブロンダヒシン」である。「ブロンダヒシン」にも多くの寫本があるが、大體「インディアン、ブロンダヒシン」と「イラニアン、ブロンダヒシン」の二種に區別することが出来る。而して、前者は寧ろ後者を基として造られた寫本で、四十六章より成る「イラニアン、ブロンダヒシン」が、最も信すべきものとせられてあるのである。此原本が書かれた年代、並に作者に就いては、他のパトラヴィー語の諸作の如く、多くの異説が行はれて明確に知ることが出来ない。兎に角、「ブロンダヒシン」はその名の如く、元「創造」を描く目的を以て書き始めたやうである。されば、先づアウラマヅダ及び惡魔の世界創造を説き、「アヴァンタスベング七天使」を説明し、創造と關係ある六季節

に就き叙述し、續いて、宇宙の形態、神話、稗史等に説き及んで居るのである。而して、天文學に關する章、争鬪する善惡二界の創造、七天使と七天地との關係、水、火、星等の十靈と惡魔との争等を叙述して居る諸章、土、水、火、風、雲、人、草木等の性質を神話的に説明する諸章、人體と此世との幻想的比較、死後「審判橋」に於ける出來事を述べる章、復活と未來の存在に就き説いた章等、全部、四十六章に亘つて神話的傳説が誌されてあるのである。此「ブロンダヒシン」に説く處を見ても、一部の學説のやうに、ゾロアスター教の惡魔は全知全能でなくて、彼が冥府より來つて光を見るまでは、アウラマヅダの存在を知らなかつたのみならず、惡魔には未來と云ふ感もなく、勿論、復活し得るや否やも考へなかつたのである。後世、一部の學者が、ゾロアスター教を二元教であるかの如くに説いたのは誤解であつて、矢張全知全能の神アウラマヅダのみを拜する一元教であるのである。

次の、「ダータイスターニー、デーニグ」(Dāstānī Dēnīg) は、「宗教私見」とも稱すべき作であつて、現存する寫本は、その卷末に誌してある年月に依ると、西紀第十六世紀頃に寫されたものゝやうである。原本は、第九世紀の頃キルマン、フールス地方に居つたマリーヌーシットシーハー、(Mānūshihār) と稱するゾロアスター教の牧僧監督が、九十以上の宗教上の質問に對し彼の意見を書いたもので、彼の隨筆のやうなものである。普通、此「ダータイスターニー、デーニグ」と共に、ゾロアスター教徒の風俗習慣等を記したリヴァーヤット (Rivāyat)、「マリーヌーシットシーハーの書翰」、「ザートスバラム (Zātsparan) の隨筆」等の小品が包括されて居る。此「マリーヌーシットシーハーの書翰」は、三部より成り立つて居る。彼の弟ザートスバラムが、キルマーン地方に牧僧たりし時、その地方の住民が、齋戒に就て説いた彼の新しい訓言を非難して來た苦情に對する、マリーヌーシットシーハーの慰言が第一書で、第二は、弟に對す

る忠言、第三は、公衆に向つて發した教令であつて、何れも、第九世紀の末に書かれたものである。

以上の外に、「シャイヤスト、ラーシャイヤスト」(Shāyast lā-shāyast) と稱する訓戒集、「ディーナギー、マイーノギー、ヒラット」(Dihā-i Maingō-i Khirāt) と稱し、宗教上の質問六十二に對する答辨集、アータヴィーラーフの幻想物語である「アータヴィーラーフ、ナーマク」等、五十五篇が第二種のパーラヴィー文學に屬して居るのである。此「アータヴィーラーフ、ナーマク」は、一名ペルシャの「神曲」と稱せられて居るが、只、その内容の性質がダンテの名著に類似して居ると云ふだけに止つて、到底、後者の比でないのである。今左にその一部を譯して見る。

〔(前略) 後、我、渴と飢とに跪きつゝ、己れの胸にて小山を引掻く女の靈を見たり。『此女は如何なる罪を犯せしや』と訊けば、神を敬ふスローン、

天使のアータロー曰く、「彼女は彼女の赤兒に乳を與へずして渴と飢とに任せ、自らは貧慾と私通の爲めに他の男を尋ねし不義の女なり」。

(第九十五章)

最後に第三種に屬するパーラヴィー語の作には、宗教に關係なき諸作品、碑文等が包含されてあるのである。又、ペルシャ語の變化を明かに物語つて居る貨幣も、此内に網羅されてあるのである。先づ、サセーニアン時代の「ゾロアスター教徒社交乘」とも稱すべき作は、その時代の奴隸、共有財産、抵當、扶持、家族制度等のことを敘述して居る。今左にその一節を譯して見ると、

1. ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰
 ۲. ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰
 ۳. ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰
 ۴. ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰
 ۵. ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰
 ۶. ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰
 ۷. ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰ ۱۰۰۰۰۰۰۰۰۰

「(前略) 或る人、正當に二人の妻と結婚し、「爾等二人は我を共有す」と契約せし時、夫は彼等の共有物である。而して、彼等二妻は、各自獨立すれど、何れも夫を共有することを辭することを得ず。然れども、夫はその共有を變更することを得、但し變更せる時は、彼の財産の規定は従前の如し。(下略)」

等とあり、當時の社會状態の一端を窺ふことが出来るのである。

次の作は、「ヤートカリー、ザリーラーン」(Yātkar-i Zārīrān) である。一名「シャーナーマリー、グシタースブ」と稱せられ、カイバクトゥリアの王ヴィシタースブが、ゾロアスター教に歸依して後、隣國の王アールジャースブとの間に起つた、戦争記である。原本は、西紀第八、九世紀頃に書かれたものゝやうであるが、現存する寫本は第十八世紀頃のものである。此卷末には「イラン國內の都市」と云ふ題で、都市及びその創立者の歴史を誌した小品がある。此小品も、

後世の研究に尠からず裨益して居るのである。

「フリスロイー、カザーターン (Khūsrō-i Kavātan) と小姓」に題する一作には、小姓の如く卑き身分にあつた者が、自分の過去を物語つて、己が叡智を試みられんことを王に乞ひ、王の質問に答へて、最も奇麗なる鳥、最も佳味ある食物、最も良き女、最も馨しき花、最も快き音楽などにつき叙述した結果、知事に昇進した物語である。

次に有名なるは「カールナーマキ、アールタクシリー、バーバカリン」(Kārnamak-i Artakshir-i Pāpakān) であるが、此作は、サセーニアン朝の始祖アールダシールの傳記である。その概略は次のやうである。かのアレキサンダー大王の死後、ペルシヤ附近には二百有餘の群雄が割據するやうになつた。アールダヴァーン (Artavān) もその一人であつて、一部に覇權を握つて居つた。その時バーバクと稱するものが、その一洲の知事であつた。バーバクは嗣子がなかつ

たので、名家ダーラー(Darra)の未商サーサーン(Sāsān)が、牧人としてバクに仕へて居つたのを上進せしめて、己の娘を娶らせた。アールダシルは彼等の間に生れたのである。アールダシルは十五歳の時、アールタヴァーンに召されて奉仕して居たが、一日、アールタヴァーンの子と争ふた結果、厩の番人に下げられた。然るに、アールダシルはアールタヴァーンの侍女に愛せられ、遂に多くの貴重品を盗んで、共にフョリス洲に逃げ、味方を募つてアールタヴァーンに反し、勝つて一國を建設した物語を述べ、又、彼の事蹟を誌して居るのである。

その外、二十餘章に分類して、穀物、果物、鳥類、家畜等を説明したパौरヴィ語の辭解「フョリス、パौरヴィ、パौरヴィグ」(Farhang-i Pahlavig)、印度の王デーワサーーム(Dēvasārm)と、ペルシャの王フースロー(Khūsro-i Anōshak-rūbān)との間に起つた、將某の挑戦物語である「チャトラング、ナーマク」(Tshatrang Nāmak)の如き作が傳へられて居る。又、次にその一部を翻譯した

「結婚契約」の形式も亦、寫本の一として遺されてあるのである。

「六百二十七年、ヴォフーマンの月、ヤヅダカート王(諸王の王、シャトッロイヤールの子、勝てる諸王の王にして、アウラマヅダの子なるフースローの孫)の第二十年、選ばれたる日、ダドゥー、バザン、ミトッロー、某地方の某市に住む某の子、某の孫なる某と名くる或男、同じ某地方に住む某の子なる某の恵まれたる娘某と名くる或女に樂しき婚約の良き音づれを會衆に告ぐ。而して、彼女は養女なりしが、男の父の後見にありて、未だ他の男を知らず」。

云々とあり、續いて、彼等二人の心得と、花嫁に三千銀を支拂ふべきを誌してある。

以上に述べた外、貨幣の銘と幾多の碑文がある。今、その後者に屬する二三の例を擧げらるならば、先づ第一に、前章に述べたナクシー、ルスタムに銘刻

されてあるアールダシールの一碑文である。之れは單に彼の像の説明であつて、

「かのアウラマツダを禮拜する神格の人アールダシールの像、イランの王の王、神の靈裔、神格の人バク王の子」。

とのみ銘じてある。彼の子シャープール第一世が、ハーヅール、アーバード(田原Abud)に刻んだ一碑文は、僅かに百有餘の語を有する短文であるけれども、ハウグ、ウェストの如き斯界の泰斗が研究に研究を重ねて、尙、その内容の眞意を解することが出来なかつたやうである。その一理由は、彼等ペルシャ人が敷地を決定する時の風習であつた、射的の儀式を良く理解して居らなかつた爲めであると、評して居る學者もある。西紀千八百九十二年に至つて、漸く獨逸のエフ、ミューラー(Friedrich Müller)に依り、此碑文の眞意を解讀したのであるが、その全文には、

「之れはアウラマツダを崇拜し、神々の間にも位する、ペルシャ及びペルシャ

以外の王の王、神の靈裔、アウラマツダを崇拜し、神々の間にも位するアールダシールの子、ペルシャの王の王、神の靈裔、神々の間にも位するバク王の孫、シャープールの布告なり。而して、我等此箭を射る時、諸太守、諸候、諸々の偉人及び諸々の貴族等參列の上にて之を射る。我等此處に足を掛け、的の一つに箭を射る。箭の射られし處には鳥も居らねど、もし的を正しく措かば、箭は見得らるゝやうに地上に立つなり、而して我等特に王の爲めに的を此處に造らしめ、王自ら「何人も此石に足を掛け、或は此的を射るべからず」と誌せり。後、我、王の爲めに供へられたる矢を此等の的に放てり。之れは王の手にて誌さる」。

と、銘ぜられてあつたのである。

此等の外に、許多のパーラヴィー語の碑文があるけれども、文字の形態と、銘刻者の技巧とが、永年の風雨に堪ゆるに適せず、痛く磨滅して不明瞭となり、

全文を完全に解讀し得るものが、殆ど無くなつたやうである。兎に角、此等の碑文は主にサセーニアン、バラヴィー語とカルデオ、バラヴィー語の二様の文字、又、時としては希臘文字をも用ひて居るので、相互の解讀を容易ならしめて居るのである。

以上に於て、予は三種に分類されたバラヴィー語の諸作品中、主なるもの、概略を述べたが、更に茲に特筆して置きたいのは、今迄幾度か引用した最初のゾロアスター教々典二十一篇の内容である。此等の二十一篇の名稱及びその内容に就ては、既に述べたやうに、「ディンカート」第八書、並にその他の遺著の此處彼處に説かれてあるが、今その要點を述べ、且つ現存する「アヴェスタ」と、對照して見たいと思ふ。

佛國のダルメストゥターは、此等の二十一篇を、(イ)、ゾロアスター教の讚頌、祈禱文を中心としたガーサーの部。(ロ)、往時の民法、刑法、及び神話研究

に資する部、並に、(ハ)最も不明瞭なる雜集を包括して居る部、の三部に區分して研究して居るやうである。又、「ディンカート」の説明する處に依ると、此等二十一篇の數は、ゾロアスター教徒が最も聖なる頌として誦する「アフナヴァイリア」の祈文の語數に準じたのであると記して居る。而して、今ダルメストゥターの區分に從つて、此等二十一篇の内容を指摘するならば、先づ、第一にガーサーの部には次の七篇がある。即ち(一)、二十二章に亘りて、祈禱、善行、默想、道德等に就き、人類に對する忠告を記して居る「スードカーヤ」(Sūdakar)篇、(二)、三十三章に亘りて、アウラマヅダと「七天使」^{アマンヤスベンダ}に捧ぐる頌を誌し、現存の「ヤスナ」の主なる部分が基礎を描く「ストゥート、ヤント」(Stūt-yashnt)篇、(三)、ゾロアスター教を信ずべき理由、ゾロアスターの祝禱及び讚美を用ふる理由、彼の生前又没後の出來事等を二十二章に述べて居る「ヴァーシタマインサー」(Varshamānsar)篇、(四)、アウラマヅダの説いたゾロアスター教の

説明、靈的修養と、惡魔に對する防禦に關し二十一章を滿たし、今その一部を「ヤスナ」に遺して居る「バコ」(Bako)篇、(五)、元二十二章より成立つて居り、日常の宗教的生活に關して記して居る「ヴァシタグ」(Vashtag)篇、(六)、「ヤスナ」と「ヤシツ」にその一部を遺して居つて、元三十章もあつた惡魔防禦の呪文である「ハドドフト」(Hādōkht)篇、及び(七)、六十章に亘りてゾロアスターの生涯の一部を物語つて居る「スペンド」(Spend)篇の、七篇である。

第二部に屬するものには、先づ、(一)現今まで最も完全に傳へられて來た「ヴェンデーダード」篇を始めとし、(二)靈肉二界の富を保つこと、正しき途を進むべき法を説く「ニコカードゥーム」(Nikādūm)篇、(三)近親結婚につき六十五章に亘りて説いて居る「ガナバーサーニシヤド」(Ganabā-sar-nijad)篇、(四)宗教上の罪人が豫期すべき刑罰を誌して居る六十五章の「フリスバラム」篇、(五)社會の秩序と復活後の生活等に就き五十二章を滿たす「サカードゥーム」(Sakā-

ndūm)篇、(六)イラン高原に於ける人間創造とその歴史を物語つて居る二十二章の「チトゥラダード」(Citrādād)篇、及び(七)アヴェスタン、「ヤシツ」の起源となつた、アウラマヅダと「七天使」^{アマンヤスベンガ}の性格を述べ、彼等を讚美する十七章の「バカイン、ヤシト」(Bakān-yashto)篇、の七篇がある。

第三部には、最も不明なる雜集が包括されて居るが、第一は、現存する「ブロンダヒシン」の起因した「デーダード」(Dāndād)篇である。此篇は、ゾロアスター教々典中の「創世記」とも云ふべき作であつて、靈肉二界に存在するもの、説明より、死後の出來事を叙して居るのである。次に(二)恒星、遊星及び其等の善化、惡化を説き、十二宮に就き説明して居る三十五章の「ナーダー」(Nādar)篇、(三)屠獸の律を始めとし、牧僧に對する待遇、六季節の祭禮等を述べて居る二十二章の「パージャグ」(Pājag)篇、(四)上下の階級の間にあるべき秩序、並に善惡二界に創造されたものにつき五十章を滿たす「ラドダードアイー

ターグ」(Rado-dādaitag)篇、(五)王者たるもの心得、及び世の安全秩序、悪人の收獲するもの等を六十章に亘りて書いてあつた「バリシ」(Barish)篇、(六)知識に到る途を教へ、純、不純を教示する六十章の「カシキースローボー」(Kash-kisrōbō)篇、及び(七)ヴィシタースプ王とゾロアスターとの對話、並に、ヴィシタースプ王とアージュスプ王との戦争記である「ヴィシタースプ、サリストー」(Vishaspstō)篇の、七篇を包括して居るのである。

以上が、最初知られて居つたゾロアスター教々典全部の名稱であり、その内容であつたやうに、「ディーンカート」に誌されてある。けれども、最も完全に今日まで傳へられて居るのは「ヴェンディダード」一篇のみであつて、或篇の一部分は、断片的にアヴェスタン、パーラヴィー兩文學に遺つて居るものもあるが、大半は、唯その名のみが傳へられて居るのである。

斯の如く、パーラヴィー文學の概要なる部分を説明して來て、歸つて考へて

見ると、イラン高原には、古來内憂外患が引き續いた爲め、アカメニアン朝の碑文等を除く他の古代の作品は、總てその原本を失つたのである。されば、現存するアヴェスタン文學の如きも、久しく口碑に傳へられ、漸く、サセーニアン朝に到つて蒐集されたので、不完全なる断片であることが解つたが、中世期以來のパーラヴィー語の作品も亦、大半はその原本を失ひ、各種の寫本が傳へられるやうになつたのである。勿論、最近に到るまで、彼等の間には印刷が實施されなかつた。従つて、それ等の寫本も一字々々手づから寫し、然かも、寫字手の多くは、その意味する處を了解せず、唯、生計を管む爲めのみ、寫字を職業として居つた者もあつたやうである故、寫本には、不完全不正確な多くの點を、免かれなかつたのである。

斯る不完全なる状態にあるパーラヴィー文學は、その研究も進まず、複雑に變遷したパーラヴィー語に通曉する學者も至つて稀で、唯、英國のウェストのみ、



NASIR-U-DIN SHAH

近世ペルシヤ語の諸作

巍然として斯學研究に頭角を現はして居つたけれども、未だ、不可解に埋れて居る疑問な點が多くあるのである。されば、今日まで傳へられて來たパーラヴィ語の諸作が、歐洲各國の言語に翻譯されて居るけれども、眞偽を混同したものが、多く發表されて居るのも亦、止むを得ないことである。吾人が、今後の發見と研究とに期待すること亦、蓋し尠くないのである。